

ナイチンゲールの看護教育方式を取り入れた 我が国の明治期という時代

広島文化学園大学看護学部・看護学研究科

佐々木 秀 美

■ はじめに

フローレンス・ナイチンゲール¹⁾については、看護教育の創始者として、その教育哲学を含め、思想的背景について多くの検証をしてきた。その目的は、明治期中期、我が国にも諸外国同様、ナイチンゲールが実施した看護の教育方法に基づいて導入されたにも関わらず、諸外国と比して遅れを取っていると考えたからである。

維新後、設立された文部省は、学校教育の全てを管理監督するための機関である。その趣旨は、国民の教育の機会均等が根本思想であり、市民平等、男女平等に基づいていた。彼等は国民の教育の機会均等に立脚する“学制”²⁾を1872年（明治5年）に発布し、まずは、初等教育の整備を行った。次に必要となるのが初等教育を担う教員養成である。イギリスで“見習い制度”による教育を開始したのはケイ・シャトルワース³⁾であり、それは1840年（天保11年）である。救貧法行政官であったシャトルワースは、その公教育論の中で「労働者階級を無知から解放するために、世俗的教育、取り分け政治的教育を行う事であり、それには彼らを宗教的影響下に置くことにより、宗教的、道徳的心情を啓発する事である。」⁴⁾と述べ、“見習い制度”による教員養成を開始した。批評家マシュー・アーノルド⁵⁾は「イギリス公教育の臆である」⁶⁾と彼の教育方式を賞賛した。わが国でも教員養成同様、“見習い制度”による教育方法が明治期初期に導入された。その時代は、江戸時代からの武士社会における封建制度からの脱却を目指したものであり、新しい日本を構築した重要な

時期である。日本国の価値観や思想・信条等の騒乱状態であり、それに伴って政治体制や教育体制の変革があった時代であった。

“学制”の基本方針である男女が平等であるという思想は、従来、儒教主義思想が浸透していたわが国にはなじめず、国民の価値観がゆらぎ混乱をきわめ、政策転換が求められた。この政策転換によって女子教育は、男女共学から男女別教育へと変化した。既に『ナイチンゲールから影響を受けた4人の日本人－（その2）－女子教育のパイオニア 津田梅子と安井てつ－』⁷⁾でも報告したように、津田梅子⁸⁾・安井てつ⁹⁾は、明治期女子教育のパイオニアであるが、だからこそ味わった苦悩もある。国内での諸問題を解決するために明治政府は英米思想を退け、ドイツ憲法に倣った“大日本帝国憲法”を発布した。続けて“教育勅語”を発布し、儒教主義思想でもって国民の思想統一を図ろうとした。

学制”発布後に立案・実施された“医制”は、わが国最初の医療・衛生制度であり、医学教育発展に大きく貢献した。医学教育発展の中で、看護教育推進の流れもでき、西欧諸国で開始されたナイチンゲール方式による看護教育がわが国に導入された。看護教育草創期のナイチンゲールは「明確な目的は実現していかなければならないが、その目的を実現していくための道は、大いに発見していかななくてはならない」¹⁰⁾と述べ、看護学校を病院に付属させ、“見習い制度”による教育方式を取った。ナイチンゲールの教育方法については、既に『ナイチンゲール方式による看護教育の特徴とその拡がり－教育の創造と伝承－』¹¹⁾で

検証・検討した。わが国でナイチンゲールから影響を受けた人物としては、『ナイチンゲールから影響を受けた4人の日本人－（その1）石黒忠恵と佐伯理一郎－』¹²⁾でも報告したように、石黒忠恵は軍医制度を確立した事で知られる医師であり、我が国における医療の整備・充実には看護師の育成が重要だと考えたことによる。『歴史に見るわが国の看護教育－その光と影－』¹³⁾で明治期以降導入された我が国の看護教育については検証・検討したが、武士社会から、大きく思想的・政治的転換を果たした明治期の混沌とした時代にあつて、明治期中期に導入された看護教育が、当時の教育政策の中で、どのように取り扱われていたのか興味深く、改めてナイチンゲールの教育思想も含めながら検証・検討することとした。

■ 明治初期の教育政策

1. 明治維新の教育制度の変遷

1868年（明治元年）、天皇を擁して明治維新を果たした新政府は、江藤新平¹⁴⁾、大久保利通¹⁵⁾、木戸孝允¹⁶⁾らを中心に、岩倉具視¹⁷⁾を主権として教育政策を開始した。1871年（明治4年）には文部省が創設され、初代文部大臣に大木喬任¹⁸⁾が就任した。このとき設置された文部省の機能は学校教育の全てを管理監督するものであった。

彼等は国民の教育の機会均等に立脚する“学制”を1872年（明治5年）に発布した。“学制”を実施するに当たって、“身を立て名を挙げ”といった大政官の布告¹⁹⁾は市民平等、男女平等に基づくものであり、西洋の教育思想に立脚したものであった。“学制”における教育方針は、立身出世の気概を国民に持たせ、沈滞した日本の状況を打破しようとしたものである。長子以外は家督を継ぐことは許されなかった武士社会の封建的な体制下では、世襲制度であり、次男以降はいわゆるスペア的存在であった。結婚をして家を持つことも許されず、いかに才能があろうとも社会において自己実現をする事は不可能に近かった。

“学制”制定前に文部省が、草案に添えて太政官に提出した文書には「以後一般の人民必ず邑に不学の戸なく家に不学の人なからしめん事を期す人の父兄たるもの宜しく此意を体認し其愛育の情を厚くし其弟子をして必ず学に従事せしめるべからざるなり。・・・中略・・・高上の学に至て其人の才能に任かすといえども幼童の子弟は男女の別な

く小学に従事せしめざるものは其父兄の超度たるべき事」²⁰⁾と書かれている。これは全ての家庭の子女が等しく教育を受けることを奨励し、親はその子女への教育を施す義務があることの意見書である。そして一般の女子、男子と均しく教育を受けさせるべしという内容となっており、教育には男女の区別をしないという基本姿勢が明確になっている。“学制”によって従来の武士のみならず、身分を問わず全ての子女に学問を奨励し、また学問をすることによって、誰でもが均しく身を立てることが可能になった。

文部省は全国の学校を統括するものであり、全国に8つの大学区（明治6年には7学区に減）をおいた。この大学区をさらに地区ごとに中学区を置き、中学区内にさらに小学区を置いている。就学年齢は6歳、初等教育は尋常小学と名され、男女の別はない。江戸時代から実在した寺子屋や私塾、郷学校²¹⁾や義校²²⁾などが、小学校の直接的母体となって実質的な初等教育を担う教育機関となった。教育年限は下等小学が4年間、上等小学が4年間の計8年間であった。“学制”における大学は、高尚の諸学を教える専門科の学校と規定されており、その学科は理学・文学・法学・医学の4学科とされている。中学校教育の6年間で修了すると大学に入学が許された。師範学校は中等教育あるいは、高等教育とははみなされておらず、下等小学・上等小学修了者が直接、進学する仕組みである。

しかし、“学制”の教育理念は、直ぐに国学者から非難を受ける事となり、市民平等、男女平等に基づく教育政策は早くも挫折の憂き目を見た。江戸時代には、儒教主義的な人間性の教育が中心であったが、明治政府の新しい教育政策によって後方に退けられていた。1873年（明治6年）には、大木文部卿が「我国ハ我国ノ文字アリ言語アリ風俗アリ学問アリ」²³⁾との訓示を行い、“学制”に対する方向転換が検討された。結果、その教育政策の急進的な在り方を是正し、漸進的な教育政策に転じさせることとなった。そこで学監であった田中不二麻呂²⁴⁾は、アメリカのディビット・モルレー²⁵⁾の協力を受け、教育制度の改革に着手する事となった。1879年（明治12年）“教育令”が、さらに1880年（明治13年）“改正教育令”が発布され、男女別教育が明確に示された。そこで、必要となったのは女子の初等教育を引きうける女子師範学校である。

1870年（明治3年）にミッション系のフェリス女学校が設立され、以降、多くの女学校も設立されたが、中等教育とは認められていなかった。女子教育で有名な津田梅子²⁶⁾は、日本の女性の位置づけについて「日本の成長が片方だけに偏っている限り、半分の人が置き去りにされながら、後の半分の人達だけが前に進むことを許されている限り、日本は決して本当に進むことはできません。女性の地位が向上し、教育を受けるまで、日本が真に重要な地位を得ることはできないと思っていました。女性もその権利を認められるべきであり、そして社会に貢献する力となるべきです。」²⁷⁾と述べた。

明治期中期の女子教育に画期的な改革があったのは、森有礼²⁸⁾の教育制度改革に端を発する、1891年（明治24年）の“中学校令”で「高等女学校ハ女子ニ須要ナル高等普通教育ヲ施ス所ニシテ尋常中学校ノ種類トス」²⁹⁾と規定された。今まで、学校教育としての位置づけがなされていなかった高等女学校が、中学校と同格として位置づけられ、高等教育への道が開けた。1901年（明治34年）に設置された日本女子大学の設立者である成瀬仁蔵³⁰⁾より、女子の高等教育の拡張が主張された。しかし、この主張は、大正の“臨時教育会議”に至っても認められようとはしなかった。山川健次郎³¹⁾の“女子高等教育は、民族繁栄に害あり”との訴えや、高木兼寛³²⁾の“高学歴女性の出産年齢の上昇及び出産率の低下”に関する発言などで女子の高等教育は穏健なる発達が望ましいという結論に至った。高木は明治期中期、上流婦人で組織された婦人慈善会³³⁾の要請があったからとは言え、ナイチンゲール方式による看護教育を導入した第一人者である。

2. 見習い制度による看護教育の開始

さて、先述したように看護教育は初めてナイチンゲールによって創設された。その教育目的は、基本的に女性の自立と公衆衛生の普及である。看護とは、Nursing is not an Art but a Character”であると述べたナイチンゲールは「優れた看護師は優れた女性」³⁴⁾であると述べ、優れた女性は「その知性 (intellect)、倫理 (moral activity)、実践 (practice) において最上のものを患者に惜しみなく与える女性である」³⁵⁾と述べた。優れた女性が具有すべき特性、つまり、それは優れた看護師が具有すべき特性である。シャトルワース

が教育の実験と述べて“見習い制度”で教員養成を開始したように、ナイチンゲールも医療の中に新しい女性のための専門職を開拓するという取り組みを行った。その教育方法は看護学校を病院に付属させ“見習い制度”で教育を推進しようと企図したものであった。かつてナイチンゲールは「なぜ、女性は男性のように抽象的概念を理解する事ができないのか。なぜ女性たちは男性と比較して創造性に欠け、知性に欠け、自己決定ができず、宗教的感化も少ないのか、何故、女性たちは芸術や科学あるいは文学の世界で一つの業績も果たすことができないでいるのか？」³⁶⁾との疑問を父親に投げかけ、システムの訓練や教育の機会が女性には少ないと述べている。佐々木秀美著『ナイチンゲールとミルとの論争ーヒューの論文を手がかりにー』³⁷⁾によれば、女性の権利問題でミルは、女性達に参政権を与えれば、女性は女性達に課せられた様々な諸問題を女性達自身で解決することができるとの見解を示した。他方、ナイチンゲールは、女性に人格が与えられるとしたら、その権利を有するに相応しい責任と義務を果たせる女性に変容させる必要があった。つまり、そこには女性にシステムの教育を施すというナイチンゲールの教育構想がある。彼女は、女性達を可能な限り訓練・組織化し、職業的自立・精神的自立を促進、女性達が社会的に有用である事を証明したかったのである。

この事をナイチンゲールは、労働によって自らの生活の糧を得ている勤労精神にあふれている女性達、修道女のように奉仕の精神を持った徳のある女性達、中・上流の知識はあるが現在のところ、職業的意識の薄い女性達などの層の厚い階層の女性達を可能な限り訓練し、組織化しようとしたものである。ナイチンゲールは緻密なまでにシステムの規則を作り、その規則に同一に従い、同一の義務を果たすという激しい体制に基づいていた。ナイチンゲールが教育実践の成果として優れた看護師を輩出することができ、彼女たちの実践によって、女性たちは社会的に有用であると評価されることになる。それはフリードリッヒ・エンゲルス³⁸⁾が述べたように“社会の病気”に対する手当てでもあると同時に女性の人格形成に伴う一種の実験的な試みであった。

そして、その場合の教育についてナイチンゲールは「Discipline (訓育、訓練、規律)こそが訓練 (training)の本質である。」³⁹⁾と述べ、「訓練

とは何が成されねばならないかだけでなく、どの様に成すべきかも教える事である。」⁴⁰⁾と述べた。Discipline”の語源はラテン語のdisciple(学ぶ)であり、多くはキリスト教に象徴されるように、戒律や規律によって人格の陶冶を目指す精神修養の事をいう。これらは修行僧が自己自身に過酷な苦行を強い、身体的・精神的限界まで自身を追い込むことによって悟りを開く世界のことである。ナイチンゲールは、訓練による教育が子どもを鞭打って教育してきた代名詞の様に考えられてきたことを否定しながら、訓練が決してそのような教育方法ではなく、道徳的、身体的、精神的な能力を最大限高めようとする働きかけであるとして、自然の法則の中で、その秩序や方法を正しく理解して行く力を持つようにするためのものであると考えた。また、彼女は「訓練とはあなたの方の中にある財産をあなたがたが活用するようにすることなのです。」⁴¹⁾とも述べている。つまり、教育が望ましい形に変容させるといった外形的な形成作用であるとしたら、訓練は本人に内在する能力を最大限発揮させることにある。人の精神は自己の内外における経験や活動を通して成熟・発展させている。ゆえに、ナイチンゲールは、女性達の精神は社会過程を前提に開発・発展していくと考え、社会への解放を企図した。それは、女性の人格の問題解決のための、知性の開発的・実験的工夫がある。

看護師を教育するに当たって必要な事は、女性たちの能力を開発させることであり、それには良い環境の中で、経験させる事と良い教育者との相互作用に期待するものである。つまり、“見習い制度”は単なる徒弟制度ではなく、臨床実習後の帰納的な学習によって“知”の統合をすることであった。エミール・デュルケム⁴²⁾の“教育とは作用である”であるとの言葉に従えば、その教育は、良質の環境の中で経験・感化・訓練されることになる。ジョン・デューイ⁴³⁾は経験認識論的思想で、鉄は熱いうちに打たなければならない⁴⁴⁾と述べ、訓練の重要性を述べたが“見習い制度”における訓練は、教育の場や教育者の質によってその効果が半減する危険性も有し、ややもすれば人格を無視した徒弟制度的な教育に変貌する要素も持っていた。

ナイチンゲールの教育は、女性の人格と国民の健康を主眼としたものであり“人権思想”に基づいている。その根本思想に加え極めて実践的・行

動主義的思想であり、かつ、極めて“自然の法則”に添った考え方の持ち主であった。彼女はイギリスの経験認識論と科学主義時代の影響を受け、現実社会の観察で得られた情報とその分析によって社会問題を明確にし、その問題の解決・改善・改革を積極的に推進した。そして、それは、『ナイチンゲールから影響を受けた4人の日本人－(その2)－女子教育のパイオニア 津田梅子と安井てつ－』⁴⁵⁾でも報告したように、経済的、精神的・社会的に自立した女性が理想的な女性であるとの伝統的な女性像を覆したのみならず、イギリスにおける女子教育推進の源流ともなったのである。

3. 明治期の女子教育

さて、我が国の女子教育はいかにあったのか。江戸時代には寺子屋という教育所があったが、それも極わずかな人々がその恩恵に浸っており、特に女性については、多くの者は識字能力がなかった。イギリスで、理想的な女性像が変革されつつあるとき、我が国、明治期の女子教育政策も基本的に良妻賢母主義である。“学制”における教育方針は男女共学が大前提であったが、“改正教育令”以降、男女別教育が根本政策となった。そこで必要となるのが女子の初等教育を担う女性の教員養成であった。教育顧問であったモルレーは、子供の教育をするのは母親であるから、女子も男子と同等に教育する必要があると考えていた。彼は「女子は児童教師として最良である」⁴⁶⁾と述べ、女性が教師としての好条件を持っていると述べている。モルレーによれば女性は情愛があって忍耐力を持っており、児童の心情を察し子供の取り扱い方を心得ている。ゆえに、女性は教師として適性があるというのがその理由であった。彼の進言によって1874年(明治7年)、田中文部大臣は「人民ヲシテ暫時漸次開明ノ域ニ臻(イタ)ラシメント欲スル、女子師範学校ヲ設クルヲ以テ一大要務トス。蓋シ女子ノ性質婉(エン)静萱(ギ)ニ能(ヨ)ク其ノ教科ヲ請ズルヲ得ルノミナラズ向來幼穉(チ)ヲ撫養スルノ任アレバナリ」⁴⁷⁾という建白書を太政官に提出した。これは先のモルレーの進言を受けたものであり、国民を啓蒙するためには女子師範学校を設立する必要があると書かれた。彼等の要望によって1875年(明治8年)、東京女子師範学校が設立された。

師範学校の課業で注目したいのは養生論である。『教員養成』⁴⁸⁾には、明治10年代に使われた

と思われる上等小学教科書として、フィラデルフィヤ医学校の小児科医ゲッセルの著作『子供育草』⁴⁹⁾、アメリカのハスケル著作『家政要旨』⁵⁰⁾、クレンケとハルトマンの育児書『母親の心得』⁵¹⁾、マルチンダルの『養生浅説』⁵²⁾等が紹介されている。これらは、家政学的要素が強いが基本的に子育て論である。『子供育草』は、その緒言に書かれているように小児養育に必要な哺乳、寝眠、浴場の方法から衣食住に関することであり、それらは子供の身体を強健にするために必要な事柄であると述べられた。例えば、浴場の方法では、不潔が病気をもたらすと述べられ、身体の清潔に対する習慣を持たせるべきであると述べられ、空気については、悪い空気を吸うことは身体にとって悪影響であるとして、室内の換気の仕方を図示しながら説明している。『母親の心得』は、訳者が序文で女性は結婚して子供を産んだら、その子供を養い育てることが大きな任務であると述べたように、ドイツ人医師クレンケ著作の『ムッテル、アルス、エルチヘリン』と、ハルトマン氏の『養生説』を加えた著作である。著作の主な内容は知恵の発達と五感、子供の遊ばせ方、言語の教え方など、子供の成長・発達に関することである。続いてその成長・発達段階で引き起こされる子供の病気の対処法について述べている。

『家政要旨』の上巻は、将来主婦になるべき女性の家事管理についてであり、家屋の購入から雇い人の取り扱い方、客のもてなし方、料理・洗濯にいたるまで懇切丁寧に書かれている。下巻は妊娠・出産・育児に対することが多い。特に出産に関しては分娩前・中・後の看護の仕方についてである。家庭出産が主流であった頃は、出産の経験者や産婆と呼ばれる職業の者が出産に携わった。この方法だと出産に直接携わる者の他に介助者が必要である。ゆえに、何をすべきか教育する必要があるのだろう。この著作は助産を専門とする女性たちが学ぶにふさわしい高度な内容である。『養生浅説』は、人身の発育を変動する諸般にあわせ、諸機能を健全に発育させることが養生学であるとして、人の生命維持に必要な不可欠な空気・水について論じている。内容的には人体の発育を人体構造機能学的視点から述べられ、併せて看護法にも記述が及んでいる。

女子師範学校で教育されたこれらの養生論は、子供の健全育成に関わる内容で構成された育児書である。しかし、どちらかと言えば、医学・看護

学的要素の強い内容である。それは著者のほとんどが医師だったことに由来するのであろう。これらから尋常小学校の教育に当たるべき教師には、発育盛りの子供たちを健全に育成するための方策を学ぶ必要があると考えられ、看護法などの教育を行ったものと考えられる。教師への健康教育は間接的には、将来母親になる女子児童に反映されることを期待したのであろう。

人々の健康に関する教育に関してナイチンゲールは人一倍関心を持っていた。1860年(万延元年)に出版した『看護覚え書』⁵³⁾の序文に、その本の目的は看護教育のためではなく、イギリスの女性たちに向けたと書かれている。彼女は、「学童のうちの少女達、彼女達もやがては母親となり」⁵⁴⁾と書き、母親達が科学的な知識を十分持ち合わせていない為に、迷信が横行し、その迷信によって病気が判断されている。ゆえに、学校の教師には公衆衛生などの知識を教育、伝授する必要があると述べている。ナイチンゲールが述べたように、家族の健康を守る役割を持つ女性達が、家庭内で住居を如何に清潔にするか、身体を如何に清潔に保つかという事は、子ども達の健全育成のために重要な知識である。彼女は教育された女教師達が少女達にその教育を施していけば、伝染病等も未然に防げると考えた。ナイチンゲールの著した『看護覚え書』が浸透していたとは考えられないが、わが国でもこの頃、家庭看護が主流であり、将来、家族の健康を守るべき少女達に健康教育をという点で、同一見解を持つ著者たちの養生論が女教師達の教育内容に反映されたと考える。

明治維新と共に特にわが国の民衆を苦しめたのが伝染病であった。伝染病はその専門の病院に収容して隔離するのが最も良い。しかし、病院が不足した場合、あるいは病状が軽い場合は家庭内で療養することになる。家庭もある意味では一つの隔離状態を作り出すことが出来る。病識があって看護を行うのとそうでない場合との差は大きい、身体内外の環境の変化が人々の健康問題との関連で、学校教育政策における看護教育構想はなかった。

■ わが国における初期の医療・病院看護

1. わが国における医学の系譜

生老病死は仏教の教えの中で、人間が有する四苦である。その苦しみから逃れるため救済活動は

祈る事であったが、医療は四苦を科学的に解明し、確かな施療をすることである。

杉田暉道他著の『看護史』⁵⁵⁾には、わが国の近世医学の歴史をかざるにふさわしい医学者として、桃山時代の曲直瀬道三（まなせどうさん）⁵⁶⁾を掲げている。道三は中国の医書を研究し、多くの難病を治療し救ってきた。しかし、彼は権威のある医学書のないことを憂いて『啓迪集』を著した。『啓迪集』の内容は「諸家が最も大切なかなめとしたものを広く集め、これに力をつくして意をきわめた。」⁵⁷⁾と書かれており、数十年の月日を使って纏め上げたものである。『啓迪集』の由来は彼の子孫を教え導くため（啓迪）のものであり、その根本精神は“医は仁術”という儒教精神による医師の理念である。彼の子孫は豊臣・徳川時代に重用され、医事を司る長官になるなど、300年間にわたって重んじられた。江戸幕府が採用した儒教思想は、寺子屋などの庶民教育によって民衆の間にも浸透した。

貝原益軒⁵⁸⁾は『養生訓』を著して、日常生活における個人衛生の重要性と、その実施法についてわかりやすく述べている。『養生訓』の序文には、「人の身は父母を本とし、天地を初とす。天地父母のめぐみをうけて生まれ、又養われたるわが身なれば、わが私のものにあらず。天地のみたまもの、父母の残せる身なれば、つつしんでよく養ひて、そこなひやぶらず、天年を長く保つべし。是天地父母につかへる奉る考の本也。」⁵⁹⁾と記述されている。つまり、彼によれば自分が今そこに存在しているのは、天地の恵みによるものであると同時に父母によって養われたものであるから、人間の生は父母を通して存在するが、その実は神から授かったものである。ゆえに、自分の体は粗末にしてはいけないと述べている。益軒はこの著作を通して、人の生涯を健康で長生きするようにと説き、その方法は食事・排泄といった人々の日常生活に即したものであり、これを実行すれば健康的な生活が得られ、長寿に結びつくということである。長生き、それこそが生を受けた親に対する孝行であると彼は説く。

道三の実証的方法⁶⁰⁾から、人体内部の構造と機能に関心をもって追求したのが山脇東洋⁶¹⁾である。山脇東洋は、従来の中国医学の解剖生理学が極めて不完全であることから、わが国で初めて医学研究に人体解剖を行った。杉田玄白⁶²⁾は真の医学は西洋を模範としなければならないと考え

た。八代将軍吉宗は鎖国時代にも関わらず蘭学書の輸入を解禁した。その事によって、中国から渡ってきたものを中心にしていた学問に新しい光が与えられた。玄白は独学でオランダの解剖書を訳し、『解体新書』を1774年（安永3年）に著した。本書の出現によって、西洋医学の実験的実証性の認識が広まり、オランダ医学書の翻訳が活発になり、西洋文化が広く受け入れられるようになった。

華岡青洲⁶³⁾は世界最初の乳がん手術の成功者である。当時、誰も思い浮かばなかった確実な全身麻酔薬を作ることに成功した。この麻酔薬で手術を行ったのは1804年（文化元年）10月13日のことである。その前に被験者として彼の妻が実験に申し出たという。このあたりの嫁と妻の壮絶な確執に関する小説が有吉佐和子作の『華岡青洲の妻』⁶⁴⁾である。

緒方洪庵⁶⁵⁾は幕末における日本の蘭医学者の第一人者である。彼は、長崎の出島でオランダ人医師、ヨハネス・ニーマン⁶⁶⁾のもとで医学・医術を究め、1839年（天保9年）に大阪に帰った。帰阪後、適塾という蘭学を開いた。1862年（文久2年）、幕府の強い要望で奥医師兼西洋医学頭取として、江戸に赴くまでの20年間、日本最初の病理学書『病学通論』、コレラの病理・治療・予防法を書いた『虎狼痢治準』などを著したほか、道修町に除痘館を設けて種痘事業の発展に尽くすなど、多大な業績を残した。その門下生には福沢諭吉⁶⁷⁾、大村益次郎⁶⁸⁾、佐野常民⁶⁹⁾、長与専斎⁷⁰⁾など、わが国の近代化に貢献した傑出した人物を輩出した。

そして、医師養成の為に設立されたのが長崎養生所である。長崎養生所は江戸幕府によって設立されたわが国最初の西洋式の病院である。この養生所は1857年（安政2年）江戸幕府に招かれて長崎の海軍伝習所医官として来日したオランダ人軍医ヨハネス・レイディウス・カタリヌス・ポンペ・ファン・メールデルフォールト⁷¹⁾の要請によって設立された。1860年（万延元年）には設立が認可され、1861年（万延2年）開校に至った。国民の健康を維持・改善・増進するといった医学的取り組みは、儒医からオランダ医学、さらに英米医学からドイツ医学が優勢になった。そうした医学の系譜の中で長崎養生所もまた、時の流れの中で、短期間でその役割を終えた。

2. 維新後の医学教育

医学教育は“学制”及び“医制”によって教育が整備された。1872年（明治5年），“学制”発布後の1874年（明治7年），“医制”が文部省によって発令された。“医制”は専齋によって立案され、実施に移されたわが国最初の医療・衛生制度である。“医制”発布前の1869年（明治2年）には、既に医学教育建白書が土岐源頼徳⁷²⁾、石黒伴忠恵⁷³⁾、長谷川平泰⁷⁴⁾の3名によって提出されている。それには「恭しく惟みるに聖廟深く医教の地に墜るを憂へ新に医校を開き大に海内の英俊を抜んで遠く欧州の哲士を招き以て濟々たる多士を育するは蓋し皇国の医教をして海外万国の上に擢んで皇国の生靈をして海外万国より壽考ならしめんと欲するにあり」⁷⁵⁾と書かれている。彼らは日本の医学水準を上げるためには、外国から適切な人材を雇用する必要性があることを述べている。彼らが求めたように、その後に来日したベンジャミン・カール・レオポルド・ミュルレル教授⁷⁶⁾、テオドル・エドワルド・ホフマン教授⁷⁷⁾、エルヴィン・フォン・ベルツ教授⁷⁸⁾、ユリウス・カール・スクリバ教授⁷⁹⁾などは帝国大学医学部におけるドイツ医学の基礎を築いたばかりでなく、日本の医学の発展に貢献した。

1871年（明治4年）岩倉使節団⁸⁰⁾と行動を共にし、欧米各地の医療制度を視察した専齋はサニタリーやヘルスの言葉と共に国民の健康保護に関する行政組織の存在を発見した。専齋は、国民の健康保護の実現のための本源は医学教育にあると考えた。彼は1873年（明治6年）、全文、七十六ヶ条からなる医制の成案を文部省経由で太政官に上申した。彼らが渡米した頃の英米の医学教育もさほど進んでいたわけではなかったが、医師達の組織が結成され、多くの研究業績が報告され始めていた。例えば、1832年（天保3年）、イギリス医師会が設立され、1841年（天保12年）にはアメリカ医師会が設立されている。

ルイ・パスツール⁸¹⁾は狂犬病に関する研究を行い、犬の予防接種を行うことによって狂犬病を減少させた。ジョセフ・リスター⁸²⁾は病気の細菌説を外科領域に応用した。ロベルト・コッホ⁸³⁾は細菌学の基礎を築いた。1874年（明治7年）にはアーマウアー・ハンセン⁸⁴⁾が癩菌を分離した。使節団に同行した専齋は諸外国の医療の現状から、少なくとも、日本での医学教育の質的向上がなければ、感染症予防など、国民の健康を守るこ

とはできないと考え“医制”発令に至った。

『医制百年史』⁸⁵⁾には、衛生行政の目的及び機構、医学教育、病院、医師、産婆、針灸業者、薬事などに関することが規定されている。衛生行政は、第一に医政は、国民の健康を保護し疾病を治療し、医学を興隆する為であると述べられ、その、行政機関として文部省医務局に医監、副医監を置き、その統括の下に全国を七区に分かつてそれぞれに衛生局を設けと記述されている。次に医学教育については、各大学区に医学校一所を置き病院を付属させるとしている。大学区というのは先述した“学制”における行政組織であり、全国に8つの大学区（1873年《明治6年》には7学区に減）を置いた。つまり、この時点で医学校を7－8校設立する予定であった。入学資格は14歳以上で18歳以下の小学校卒業者であり、教育期間は予科三年、本科五年の計八年である。本科の科目は解剖学、生理学、病理学、内科、外科及び公法医学（裁判医学及び護健法）である。又、病院長は医師の免許状を有するものでなければならぬと規定され、その他、産婆の業務制限と免許に関する規定がなされた。“学制”における大学は、高尚の諸学を教える専門科の学校と規定されており、その学科は理学・文学・法学・医学の四学科である。

そうした教育政策の中で、1887年（明治20年）には、近代西洋医学の基礎が帝国大学を中心に来た。帝国大学は、1630年（寛永7年）に江戸幕府の学問所として建てられた昌平学校、1811年（文化8年）に洋学者を採用して洋学の翻訳の仕事を中心に目的で建てられた開成学校、1860年（万延元年）に種痘所として建てられた医学所の3校が、1869年（明治2年）に合併してできた大学である。当初、前者2校を大学南、後者を大学東校としていたが、1877年（明治10年）文部省直轄となり、東京大学となった。明治以降、同大学はわが国の教育機関の最高峰としてあらゆる分野のパイオニア養成を目指してきた。その他、京都大学、大阪大学、九州大学、東北大学などが設立され、医学教育は全国的に整備・充実した。しかし、この時期、東京大学等で学べる医学生は少数で、医学を学ぶ者の大半は実際、医業を実施している医師の側で手ほどきを受ける、徒弟制度的な“見習い制度”であった。

わが国の公衆衛生に目を向けると、西洋の教育制度を移入するのと時を同じくして西洋との往来によって、町にはかつてなかったような天然痘や

コレラが大流行し国民を悩ました。また、国民の方にも総じて微生物が感染症を引き起こすという知識は、皆無に近く、これを治療・予防するという概念はなかった。コレラが始めて日本に上陸したのは1822年（文政5年）のことであり、全国的に蔓延した。その後、1858年（安政5年）の侵入では猛威を振るって、死者が江戸だけで10万人から20万にも及んだ。1876年（明治9年）から1925年（大正14年）までのコレラの患者数・及び死者数の年次推移（図1）にあきらかである。コレラ発病者のほとんどが死亡しており、当時の医学水準が伝染病のもとにいかにも無力であったかである。1880年（明治13年）には“伝染病予防規則”が制定され、予防対策がなされたが、大流行は数年間隔でしばしば続いた。これらの人々を収容する為に東京府病院等が設立された。東京府病院などの施設に伝染病患者を収容したが、コレラの発病率から考えると、何十万にも及ぶ患者を収容するための病院は少なく、隔離をするのも困難であったろう。医療が進歩している今日であっても、重症急性呼吸器症候群（Severe Acute Respiratory Syndrome）やエボラ出血熱（Ebola hemorrhagic fever）の猛威にパニックを起こしている現状から想像すると、衛生状態の悪さと混乱している国内の状況が明瞭である。その上、国民は貧困と飢餓状況に加え無知であった。1883年（明治16年）に設立された大日本私立衛生会はこうした状況を打破すべく、国民の健康の保持・増

進を目的とし、衛生知識の普及に努めるなどの活動を行った。

伝染病や公衆衛生の問題に加え、貧民の群れも相当であり、国内の治安も悪かった。『文明開化東京』⁸⁶⁾によれば、社会事業の一つとも言える養育院が設立された。養育院は、貧民収容所として建てられ、イギリスの救貧院にも似た施設である。収容された者の中には単なる浮浪者や心身を病んでいる者が多く存在した。この養育院に世話役として迎えられたのが瓜生岩⁸⁷⁾であった。瓜生は戊辰戦争時の傷病兵の看護でも有名であるが、その後も数々の社会活動を行った。1890年（明治23年）の新聞報道には彼女の業績をたたえる記事が掲載されている⁸⁸⁾。

3. 病院看護の始まり

杉田暉道他著の『看護史』には「江戸の小石川養生所で収容患者の世話にあたったのが、わが国の職業的看護の始まり」⁸⁹⁾と書かれている。江戸町奉行の主管であった小石川養生所⁹⁰⁾の施療は庶民のためであった。その様子は、江戸の町を背景とした時代劇小説に良く描かれる。維新以降、江戸時代以来の武士社会が崩壊し、失業者が群れをなし、武士達による戦いが方々で起きた。戊申戦時下の負傷兵の看護については「会津籠城の際に、藩主の姉である上杉照姫⁹¹⁾は戦火も厭わず城の本丸を開いて傷病兵を収容し、場内の婦女子を集めて陣頭指揮し、その看護にあたった。」⁹²⁾と書かれ、福山藩では、高山盈⁹³⁾が同様の看護を行い、戦時下の会津城下で負傷兵の看護で有名なのは先述した瓜生である。

維新後、官軍によって戦病者の治療の為の“大病院”⁹⁴⁾が設立された。施療目的で患者が収容されると必然的に世話をする者が必要となる。1869年（明治2年）の“大病院”規則には看病人に関する規定がある。それには看病人、看病方取締、看病方取締助の役割が明記されている⁹⁵⁾。

看病人の役割は「診察後には残り、病室の薬法書並に薬袋・薬瓶取集め、調合係へ差し出し、調合済み次第早々病者へ相渡し候事」であり、次に「病者の起床、衣類飲食その他、掃除など万事世話いたすべき事」である。つまり、看病人は現在の看護職と同様な役割を持ち、主として日常生活援助と与薬と家政に関することである。但、洗濯は女のことと記述されているから、必ずしも看病人が女性であるとは限らない。

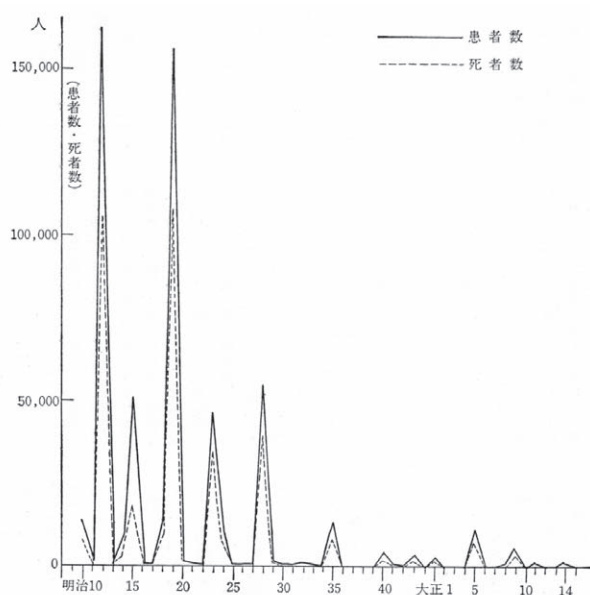


図1 コレラ患者数・死者数の年次推移
『医制100年史』より

看病方取締は、「昼夜在院いたし医師診察の節は必ず付き添い、当直・副当直医官の差図を受け、病者の看護專一に相心得、病者の摂生、病室の掃除等万事行届き候よう、精精看病人に申し聞かせ、もし不行届けの者これ有り候はその旨申し出で相罰すべく候。もっとも昼後の儀は申談、一人づつ外出苦しからず候事」と記述されている。看病方取締はその名のとおり、現在の看護部長あるいは病棟師長に類似した職種である。その役割は看護の全責任を担うものであり、その業務は全て医師の指示によるものと規定されている。

看病方取締助は、「毎日第七時半に出勤、看病方取締助の差図を受け、受持の病者包帯巻替始め、すべて病室の諸用相勤め申すべき事である。当時、看護取締をしていた杉本かね⁹⁶⁾が「私は取締をしていて、とにかく120人からの婢僕を使っております⁹⁷⁾」と述べたという。ここでいう婢僕とはつまり看護人のことを指していると考えられる。

西南戦争後に“大病院”は、東京大学医学部の付属病院として発展したが看護をする者はいなかった。『明治女性史』には「明治初年東大付属病院に入院患者ができた頃、看護師を雇うにも看護師になり手がなかったので、やむをえず吉原のやり手婆さんを連れてきて和泉橋の第一病院の看護に当てた。」⁹⁸⁾と書かれている。先述したように大病院においては看病係りを設けたが、洗濯は女の仕事という役割分業から考えると、家事に関わる仕事は女性がすべきであると考えたのであろう。人が発病して、ある一つの施設に収容されれば、それに伴って家政的領域である“衣”“食”の問題が生じる。従って、病気になって入院するという事態が生じた時、患者を世話する人が必要であると考えても、看護者が患者の健康回復に重要な役割を果たすであろうことは考えられなかったようだ。1885年（明治18年）に設立された桜井女学校付属看護婦養成所では、この医学部付属病院を実習施設とした。同校の卒業生として、看護界の改革に大きな貢献をした鈴木まさ⁹⁹⁾や大関ちか¹⁰⁰⁾がいた。彼女たちは卒業後、同病院の師長として看護実践の改革・改善にも努めたが、新旧の看護師達の看護観や実践上の知識・技術等の相違は大きく、実に大きな困難を抱えた。同病院は医学の分野では、当時わが国最高水準ではあったが、看護師に関しては先述したような看護人、あるいは付き添い看護人が看護師として働いてい

たような病院であったから、教育された看護師達の登場は大きな混乱を引き起こした。

4. 明治初年の看護師達の実像

東京大学名誉教授三浦謹之助は日本における看護師の起源は「女中書生又は雇はれたる老婢寡婦其任に當れり」¹⁰¹⁾と述べ、付き添いの中から熟練した者を看護師にしたと述べている。それでは、明治期初期の看護師達の実像は如何ようであったのか。先述したように『明治女性史』に、明治初年東大付属病院に入院患者ができた頃、看護師を雇うにも看護師になり手がなかったので、やむをえず吉原のやり手婆さんを連れてきて和泉橋の第一病院の看護に当てたと書かれたように、長いキセルでタバコを吸いながら、仕事の指図をしている看護師が描写されている。

日本における看護の状況は、施療目的で来日していたジョン・カッティング・ベリー¹⁰²⁾が、1886年（明治19年）に京都同志社看病婦学校の開校時に行った演説の中に見いだす事ができる。ベリーの説明によれば、付き添い看護師システムは、特別に何もすることのなかった老婦人が病院に雇用されたことに始まり、老婦人であるが故に安価で雇われ、仕事の区分としては病棟の掃除や建物内のつまらない仕事に充当された。看護師として特別な教育を受けたわけではないから、模倣によって看護を習い、重要なケースに対してはその世話をする役目を言いつかるといった事が定着し、看護師が不足すると、この付添婦の中から正式に看護婦になるように勧められる婦人が出現した。そうした婦人たちが、直接的に自分の獲得した立場を利用していく過程で、現在の古いタイプの看護師達が出現したと語っている。彼の言葉で語られる当時の日本の看護師描写は、先述した明治初年東大付属病院が、看護師を雇うに際に吉原のやり手婆さんを連れてきて和泉橋の第一病院の看護に当てたという状況とも一致している。日本で最初の看護総取締として看護の歴史上にも残っている“杉本かね”にしても看護の教育を受けたわけではない。彼女がこの類いの女性であったかどうかは別として、当時の日本における看護師と呼ばれた看護人達は知識・技術のみならずモラルの欠如があったと考えられる。

続けてベリーは、ヨーロッパで看護師が教育される以前の看護師達と日本の看護師達の実像は類似していると述べ、日本の看護師達は「ワイロを

常に患者達に要求して自由に受け取り、ワイロを受けた患者達に対してのみ特別な看護を行い、ワイロを与えない患者に対しては食事も与えない。患者達は平等に扱われず、無視するといった態度を示した。こうした看護師の多くがアルコールを常に携帯しており、しかも、何かのときには患者達をこのアルコールで屈服させようとした。この看護師自身もアルコール常習者であり、常に、グラスにはアルコールを並々と注いで飲みながら看護をしていた。中にはタバコやアヘンの常習者も存在し、彼女達の多くが読み・書きはできない。そして夜間の勤務中の際、しばしば眠り込んでしまう。」¹⁰³⁾ という状況であったと述べている。ベリーが描写する看護師達の様子は、ナイチンゲールが看護教育を開始した頃のイギリスの看護師像と類似している。

ナイチンゲールが看護教育を開始したのは1860年（万延元年）であったが、1876年（明治9年）には、その教育実績が評価を受けていた。ナイチンゲールは、見習い生に対する書簡の中で「最近、有名な医学雑誌にナイチンゲール看護婦について書かれているのを読みましたが、小説の中で看護婦を、酒のみで下品で無知でむちゃくちゃな老女、かのギャンプ婦人のごとくに戯画化する時代は過ぎたという記事だったのです。そして更に、小説に書かれるナイチンゲール看護婦は、活動的で有能で賢明な看護婦であろうと書かれていたのです。」¹⁰⁴⁾ と書いている。ナイチンゲールが述べたギャンプ婦人というのは、チャールズ・ディケンズ¹⁰⁵⁾ の著作『マーティン・チャズルウィット』¹⁰⁶⁾ に登場する品性の卑しい看護師のことである。ギャンプ夫人は、無知で無学、アルコールやアヘンを常用し、看護専門職と称する人物である。

“学制”によって初等教育が義務付けられたとはいえ、当時、俄かに上流社会に位置づけられた人達、あるいはかつての武士階級の人達や一部の啓蒙主義者達を除いては、国民のほとんどが教育を受ける事への関心は薄く、無学なものが多かった。そうした状況下では、科学的な医療に関して知識が有る者もなく、特に、仏教的な考えの中には、病気をすること事態、本人の心がけが悪いという考えが主流であった。国民の知識そのものも相当に低く、迷信が横行していた時代であったから、コレラ除けとして江戸中がみこしをかざり、山車を出し、おどりあるくといった風習が明治初年まで続いていた¹⁰⁷⁾。病院に収容された伝染病

患者達が不幸にして死の転帰をとった場合、病院とは、実に恐ろしい所だという考えのほうが優勢であったかもしれない。その様な病院で看護をするなんて事は更に恐ろしい事であったと考えられる。その上、儒教主義思想では、たとえそれが病人の看病目的ではあっても見も知らない男性の体に女性が触れるということは貞淑さに欠けることであった。

■ 動き出す看護師教育

1. 看護教育の提唱者大山捨松

婦人慈善会は、当時の政府高官の婦人達で組織された慈善の為の組織である。大山捨松¹⁰⁸⁾ は、婦人慈善会のメンバーとして最も看護師の教育に造詣が深かった。と言うのは、捨松は北海道開拓長官黒田清隆¹⁰⁹⁾ の進言によって明治期初期にアメリカ留学をし、短期間ではあるが、看護教育を受けた女性だからである。幼き子女の渡米目的は、黒田の進言書「それ開拓の要は、山川の形勢を察し、往来を通じ、土地の美悪を検し、培養を盛んにし、似て生を厚くし、俗を美するにあり、これをなすは人材に困る。人材を生ずるは師弟を教育するにあり、今や、欧米諸国は、能く子弟を教育するものと請ふ可しゆえに今、幼稚の女子を撰み、欧米の間に留学せしめん事を欲す。」¹¹⁰⁾ に明白である。子を育てるのは母であり、母の教育がなければ優秀な子は育たない。その為にはまず女子を教育する事が大事であると考えられたものである。1871年（明治4年）、岩倉使節団に同行した5人の留学生の中に捨松がいた。

江戸時代から明治期へと波乱の人生を生きぬいた捨松は、1860年（万延元年）、会津藩一千石の家老山川尚江重固の末娘として生まれた。幼名は咲子である。山川家の屋敷は鶴ヶ城の近くにあった。戊辰戦争で山川家は事実上、戦いの真っ只中にあり、捨松も鶴ヶ城内にいて、その戦争の悲惨さを経験した。長男の山川大蔵¹¹¹⁾ は戦後処理のために、謹慎中であつた松平容保¹¹²⁾ 親子と行動をともにし、次男の健次郎は藩命により脱藩、これからの新しい時代を生き抜く人材として学問の道に進んだ。1869年（明治2年）、容保は松平家再興が許されたが、新しく与えられた土地は本州最北の不毛地帯であった。寒さと貧困生活の中で山川家は捨松を北海道、函館の地に住む坂本竜馬¹¹³⁾ のいここにあたる人物に預けられた。この頃、幼

き子女をアメリカに留学させるという構想が持ち上がった。捨松12歳のときである。

当時の新聞報道には、皇后からアメリカに向けて出発する5人の子女への、はなむけの言葉が掲載されている。「其方女子ニシテ、洋学修行ノ志誠ニ神妙ノ事ニ候、追々女学御取建ノ儀ニ候ハバ成業歸朝ノ上、婦女ノ模範トモ相成候様心掛」¹¹⁴⁾ この皇后の言葉からも、彼女達がこれからの日本の教育をになう女性達の模範になるよう求められていることが分かる。この時、幼きながらも捨松には官費留学生の一人として、日本のために役立つ人物になることを誓ったのであろう。皇后の言葉を深く心に刻んだ少女達は不慣れな外国の生活に順応した。但し、『津田梅子伝』¹¹⁵⁾によれば年長であった吉益亮子と上田貞子の両名は、慣れない外国暮らしで不適應を起こしたとみられ、10ヶ月足らずで早期帰国をしている。

捨松はニューヘブンのベーコンという牧師の家にホームステイし、伸びやかに育った。長じるにつれ、英語も流暢になった。“ヒルハウス・ソサエティ”という貧困にある女性たちや子供たちに救いの手を差し伸べることが目的の会があり、同会のメンバーとしてボランティア活動を行ったりもした。

自身の教育が修了した捨松は、梅子の教育が修了するまでの間、ニューヘブン病院に設立されたコネチカット養成所で、看護師の短期教育を受けた。同校は1873年(明治6年)にフランシス・ベーコン¹¹⁶⁾が、ナイチンゲール方式を採用して設立した看護師学校である。捨松の個人史である『鹿鳴館の貴婦人大山捨松』¹¹⁷⁾によれば、フランシス・ベーコンは捨松が預けられたベーコン牧師の次男であり、当時エール大学(Yale University)の医学部教授であった。彼の妻ジョージアナ・ベーコンは非常に積極的な女性であり、若いころから政治や社会問題に関心をよせ、強烈な奴隷制度反対論者であった。彼女は南北戦争中には献身的に傷病兵の看護にあたり、野戦病院を訪問したりしている。更に同著にはジョージアナが1879年(明治12年)に書いた『家庭および一般向け看護のためのハンドブック』は、病院や看護学校のバイブルとして愛用されたと記述されている。恐らく、高木が持ち帰ったとされる『The Hand Book of Nursing』¹¹⁸⁾はコネチカット養成所で使っていたテキストと同一であり、この著作が1880年(明治13年)にロンドンで出版されたのであろう。

捨松がこの学校で受けた教育は、衛生学の基礎知識や技術訓練、調理場実習等であった。

帰国後の捨松はナイチンゲール同様お国のための意識が顕著であったが、日本の女子教育は後退していた。女子教育に参画することが困難であると感じた捨松は、陸軍大臣大山巖¹¹⁹⁾と結婚した。捨松がアメリカで滞在中に世話になったベーコン家の娘アリス¹²⁰⁾に当てた手紙には「現在のところ、私が就職できるような仕事はまったくありません。教えることだけが今の日本が必要としていることではないと思います。今一番やらなければならないのは、社会の現状を変えることなのです。日本では、それは結婚した女性だけができることなのです。言い換えれば、教えることだけが日本を救う唯一の方法ではないということです。もし、私に教えることができないならば、日本にとって私はまったく役に立たないことになります。」¹²¹⁾とあると書き、結婚を真剣に考えていると書いている。同じころアメリカ留学を果たした兄、健次郎には帰国後、すぐに教育の場と機会が準備されていたのに、捨松、梅子らにはなかった。日本の社会が大きく変化していたのである。悩んだ末の選択であったが、捨松は結婚を選択した。梅子は帰国後、やはり仕事がなく、苦悩と孤独の日々を送っていた。伊藤博文¹²²⁾は梅子を気の毒に思い、官邸に住ませ、妻や娘の英語教師をさせた。梅子は華族女学校の開校と同時に伊藤の口利きで英語の教師になった。捨松はこの華族女学校の準備委員であった。アリスも1888年(明治21年)に来日、梅子と生活を共にしながら華族女学校の教師及び梅子の英語塾の教育に協力した。

アリスという女性は親の影響で小さい頃から人種問題に関心をもち、12歳の時に黒人達の教育に一生を捧げる決心をした。勉強家であったアリスは独学でハーバード大学の検定試験に合格、ハンプトン師範学校の正規の教師になっていた。アリスは自分の教え子が黒人であるがために看護師養成学校への入学が拒否されたことを知ると、東部の人たちから寄付を集め、ハンプトンに病院を建て、その中に看護師養成所をつくるといった積極的な女性である。1884年(明治17年)にアリスに当てた手紙には「まだお知らせしていませんでしたが、私は最近新しく作られた病院を援助するためにバザーの準備をしています。日本では慈善バザーは今までに一度も開かれたことがなく、今回ははじめての試みです。残念ながら日本人は慈

善事業についてまったく何も知りませんでした。皆さん私のアイディアにとっても賛成してください。今では東京中がこの話題で持ちきりです。このバザーは女性それも上流階級の婦人や令嬢だけの手によって運営されます。」¹²³⁾と書かれている。捨松の手紙によれば、伊藤夫人梅子、井上馨¹²⁴⁾夫人武子、森夫人常子、梅子、そして宮中で女官をしている捨松の姉¹²⁵⁾を含めた6人がバザーの準備委員であった。

しかし、鹿鳴館における仮装舞踏会などが国粋主義者たちを刺激し、絶好の攻撃材料になったのも事実であった。徳富蘆花¹²⁶⁾作の『不如帰』が実は捨松一家がモデルだったからである。不如帰(ホトトギス)という鳥は、鳴いて血を吐く鳥として考えられている。主人公の浪子は結核で療養中夫に離縁され、悲しみの中で血を吐いて死亡する。小説の中で捨松は浪子の意地悪な継母として特別に強調されて登場する。捨松は急進的で知的、外国語をとうとうとしゃべり、夫も手を焼く活動的な女性として描き出された。結核に罹患し、離縁された長女信子のために自宅の離れに家を立て保養先から引き取った。その上、小さな姉妹にその場所には行かないようきつく戒めたのである。捨松の行為は、結核が感染性の病気であることを熟知して隔離目的であったと考えられるが、逆に、無知な人たちからは、兄弟の交流をも妨げた意地悪な母親と映ったようである。

そして日本は日清・日露戦争を経験した。捨松は家庭内にあっては子供たちを厳しく教育し、国内にあっては上流夫人たちによる日赤篤志看護師婦人会¹²⁷⁾を組織し、病院でボランティア活動を行ったりした。また、1901年(明治34年)に結成された愛国婦人会という組織などを活用して積極的に救護活動を行った。愛国婦人会というのは、戦死した兵隊の子供や未亡人の世話をする会である。彼女は「今日本は戦争で戦っている兵士たちを慰めるためなら、自分のもっている物を全部あげてもよいという気持ちであふれています。東京はもちろんのこと、日本のどんな小さな町にも委員会が作られ、兵隊の留守家族を援助するために募金が集められています。そのお金で、生活に困っているたくさんの留守家族が救われました。日本赤十字社の会員の婦人たちは、毎日病院に行き包帯作りをしています。私も時間の許すかぎり病院に行き、朝の9時から午後4時まで働いています。皆、看護師の制服を着て、手や服を消毒して

から仕事をはじめます。陸軍は防腐処理に関してとても厳しく、処理をしていない包帯は絶対受け取らないからです。今までに数百万本以上の包帯を作りましたが、まだ足りません。」¹²⁸⁾と述べ、自分自身が役に立つことならどんなことでも協力をしたいとの考えを示している。

捨松は、当時の日本女性としては非常に知的で情熱的な女性であった。日本の女子教育に役立ちたいと考えていた捨松は、縁あって看護の教育を受け、帰国後に結婚した夫の職業柄、傷病兵の看護に関心を持ち、兵士たちの家族の心配をすることといった組織作りまで行った女性であった。当時の女性としては並外れて知的であり、ナイチンゲールが述べた理想的な女性であった。

2. 婦人慈善会による看護教育の提唱

捨松は、婦人慈善会のメンバーである政府高官の夫人たちと、設立されたばかりの有志共立東京病院を参観する機会があった。有志共立東京病院とは、高木によって設立された民間病院である。彼は、1875年(明治8年)に聖トマス病院医学校へ留学した。高木が留学した頃の日本は英米主導型であったが、帰国時の国内の状況は一変していた。留学中の1877年(明治10年)には、西南戦争¹²⁹⁾が起き、政治の体制も変っていた。国内ではキリスト教主義的思想から儒教主義思想への転向が繰り返され主張されていた。政局の混乱の中、外地との交流で伝染病も多かった。又、軍隊では脚気(beriberi)が多くその予防と治療が行われなければ戦力にもならない状況であった。東京における脚気の発生状況はベルツ教授や高木の論文発表によって世界に発信された¹³⁰⁾。1879年(明治12年)には“法定伝染病”が指定され、翌、1880年(明治13年)には“伝染病予防規則”ができた。しかし、衛生状態は悪く、国民は病や貧しさと闘っていた。こうした劣悪な状況の中で、高木は1882年(明治15年)、伝染病患者を収容するために設立されていた東京府病院の一部を借用して民間病院である有志共立東京病院をスタートさせた。

コネチカット養成所で、看護師の教育を受けた捨松は、有志共立東京病院で病人の世話をしているのが、看護人ばかりなのに驚いた。彼女は同病院の高木院長になぜ、看護に女性を使わないのかと質問したという。捨松は看護師という職業が欧米社会では高く評価され、人々から尊敬されてい

ることを説き、日本における看護師の育成に深い関心を寄せたと『鹿鳴館の貴婦人大山捨松』¹³¹⁾には書かれている。婦人慈善会のメンバーは、西洋における看護師教育の実情を知ると、わが国でも看護師教育の必要を感じた。そこで彼女達はイギリスの留学を終えて帰国した高木に、看護師教育開始の要請を行ったのである。看護師教育に必要な財政的な基盤がないこと知った婦人慈善会のメンバーは、先述したように“レディス・フェア”と銘打った盛大なバザーを行った。席上、彼女たちは“看護師教育所設立の主旨”という文書を参加者に配布し、資金集めに協力を求めた。

その文書には「若シ不幸ニシテ疾病ニ罹ルトキハ速ニ来レ之ヲ驅除シテ全快センコトヲ望ムハ人情ノ免ザル所ナリ今ヤ其意ヲ果サンニハ良医ヲ聘シ其指図ヲ守リ看護ヲ尽クスニアリ然ルニ医師ノ処方ヲ詳ニシテ之ヲ行ウハ実ニ容易ノ業ニアラズ為ニ往々之ヲ誤ル者尠カラズ湯絵故ニ医師ハ術ニ巧ミナリト雖（イエド）モ看護宣シキヲ得サルヲ似テ奏効セサル者多シト殊ニ重病者ハ必ス医師ニ対シ其容体ヲ精密ニ告ケ得ル看護者ヲ要スルモノナリ若シ其設ケナケレバ病症ノ経過等不明且やく薬餌ノ授与等ニ誤リ勿ラシメンニハ之ニ相当ノ教育ヲ受ケタル者ニ非ラサレハ能ワサルガ故ニ海外諸国ニ在テハ看護師教育所ノ設ケアリテ之ニ充ツト云フ然ルニ本邦ニ於テハ未ダ其設ケナク実ニ聖代ノ欠典ト謂フベシ」¹³²⁾と書かれた。彼女達は家族に病人がでたとき、看病をする人がいないことを憂いた。もし、不幸にして病気になった場合、医師の力は大きい、看護の力を借りればそれにもまして病気の回復を効果的に促進することが出来る。外国には看護教育所というのがあって、病人の看護をする者の教育を行っていると聞く。ゆえに専門に看護をする者の為の教育所を日本でも設立するべきだとの内容であった。

鹿鳴館は当時、外務卿であった井上の提案によって建築されたものである。著作『鹿鳴館』¹³³⁾によれば、「日本が国際上、不利益を蒙っているのは全て条約の不備によるものであり、これを是正して対等の条約を結ばなくてはならないが、それには法律、制度などを整えることとともに、日本の文明が欧米諸国のそれと同水準でなくてはならない。」¹³⁴⁾と考えられ、文明の促進が大切であるとの考えにいたったとのことである。条約の不備というのは1857年（安政4年）に締結された安政の五カ国条約のことであり、治外法権の問題も

含めて不平等条約とも言われている。井上はその法改正を考えていた。そのため、彼は国際交流の場としてあるいは社交場としても活用できる建築物を計画したのである。井上の構想によって外交の館が建築家ジョサイア・コンドル¹³⁵⁾によって設計され、1883年（明治16年）11月28日に落成式を迎え、鹿鳴館と命名された。

婦人慈善会が1884年（明治17年）に開催した第一回バザーは、有栖川宮熾仁親王御息所薫子¹³⁶⁾を総長に、威仁親王妃慰子を副総長にすえて推進した。この売上は全て、有志共立東京病院に寄付されたと著作『鹿鳴館』には書かれている。鹿鳴館では、夜毎、仮装舞踏会などの社交が繰り広げられた。儒教主義的な女性像は質素堅実であり、洋風の華やかな雰囲気は軽薄な女性像として受け止められ、洋風かぶれと非難される事が多くなった。磯田光一著の『鹿鳴館の系譜』には「鹿鳴館がどう批判されようと、それは生まれたばかりの近代国家がやむなく試みなければならなかった化粧であった。悲哀をこらえて、無理な背伸びをしようとする健気な志なしに、あのような建物が東京に建てられるはずはなかった。」¹³⁷⁾と記述されている。しかしながら、この鹿鳴館でのバザーの収益金は6,364円にもなり、この寄付金を基金となって1885年（明治18年）に有志共立東京病院看護婦教育所が設立された。わが国の上流婦人達の博愛主義的あるいは実用主義的な発想によって看護教育の為の資金が得られ、我が国で初めて看護教育は開始された。

3. 看護教育の創始者－高木兼寛

婦人慈善会の要望によって看護教育を開始した高木とはいかなる人物なのか。『高木兼寛伝』¹³⁸⁾によれば、彼は宮崎県下級武士の出身である。医学を志し、医師になった高木は戊辰戦争が勃発し、医師として参戦したが自分の医師としての力のなさを悟った。そこで、高木は薩摩に医学校が設立されることを知り、医学の再教育を決意した。

薩摩の医学校というのは現在の鹿児島大学医学部の前身である。医学校の校長には英国公使館付きウィリアム・ウィリス¹³⁹⁾が、就任することになっていた。ウィリスは先述した大病院が、江戸幕府時代の医学所と合併して医学校兼大病院となった1869年（明治2年）、大病院の院長に就任、診療の傍ら学生に講義を行った。院長以前のウィリスの野戦病院における診療の評価はすこぶる良

好であった。が、将来の日本の医学界を引っ張って行く指導者としての腕には疑念の声が高く、新政府はドイツ医学を採用する事に決定し、彼の職を解いた。この後、ウィリスは西郷隆盛¹⁴⁰⁾との親交で1869年（明治2年）、薩摩藩が建てた医学所に誘致されたのである。

ウィリスが、鹿児島医学校の校長に就任後、高木は同医学校の第一期生として入学した。ウィリスに師事した後、彼は1873年（明治6年）に、海軍病院内に海軍医学校が新設されたのを契機に東京に招集された。当時、東京の海軍医学校には、イギリスの聖トマス病院医学校の出身者であったウィリアム・アンダーソン¹⁴¹⁾が教鞭を取っていた。その後、アンダーソンの推薦によって高木は、1875年（明治8年）に聖トマス病院医学校へ留学した。

高木が留学した聖トマス病院は、ナイチンゲールが看護婦学校を付属させた病院である。ロンドン市内に有数の病院の中で彼女が聖トマス病院に看護婦学校を付設しようとした理由は以下の三つである。

まず、第一に聖トマス病院に移転新築の話が出ていたことである。ナイチンゲール方式に従えば、看護の教育には優れた設備を有した病院が必要であった。彼女は、当時のイギリスに建築されていた病院の構造上の欠陥を『病院覚え書』¹⁴²⁾で指摘しており、病院が病院としての機能を果たすためにどうしても建築上の問題を追及しておく必要があった。それは病人の健康の回復には、新鮮な空気と明るい陽光が必要だからである。聖トマス病院が新築移転する際には、彼女が理想とする病院に改築できる可能性があった。クリミアでの従軍経験、あるいは、当時の病院での死亡率からナイチンゲールは、通気が良くて採光に注意したパビリオン方式と呼ばれる建築方式で聖トマス病院を再建築したかった。パビリオン方式は、一つの病棟で感染症が蔓延しても他の病棟に伝染を遮断できる可能性があった。第二にナイチンゲールの看護教育システムには医学とは違う分野で、その新しい職務の責任を担うに相応しい管理者及び教育者が必要であった。その意味で、聖トマス病院の看護総監督のサラ・エリザベス・ウォードローパー夫人¹⁴³⁾は適任であると考えられた。ウォードローパー夫人は、ナイチンゲールがクリミア戦争に従軍した際に、看護師の選考に協力した人物であり、ナイチンゲールの教育構想を理解して教

育実践してくれる可能性があった。そして、第三に看護の基礎教育に協力を表明した医師がいたことである。エドワード・クックの『ナイチンゲール伝』¹⁴⁴⁾やセシル・ウーダムスミスの『ナイチンゲール伝』¹⁴⁵⁾でも知られるように、聖トマス病院の医師達の多くが看護教育には反対であった。しかし、看護教育に熱心であり協力を惜しかなかった医師としてホイットフィールド博士¹⁴⁶⁾、ジョン・クロフト氏¹⁴⁷⁾の存在があった。

イギリスで、看護教育が医師達にも認められるようになったのは、1875年（明治8年）であり、看護教育が開始されてから実に15年後のことである。高木が留学した時期は、ナイチンゲール看護学校の教育成果が出始めていた。彼は教育された看護師達が、医療の中で果たす役割およびその利点に付いては十分な認識を持つことができたであろう。ナイチンゲールの教育理念は、当時、主流であった“理論と実践の一致”であり、1888年（明治21年）の『看護師と見習い生への書簡』¹⁴⁸⁾でも明らかである。

資金援助を得た高木は、ナイチンゲールが実際設計したといわれるパビリオン方式で病院を建築した。高木が帰国した1880年（明治13年）の日本の状況は、先述したように外国との交易によって伝染病が猛威を振るっていた。ナイチンゲールが構想したパビリオン方式は院内感染を遮断することが可能な建築方式であり、日本の実情から考えるとその建築方式は最適であった。彼は同時にナイチンゲールが行った教育方法を参考に、1885年（明治18年）有志共立東京病院内に看護婦教育所を付設した。看護法の教育者として、1881年（明治14年）から宣教目的で来日していたリード女史¹⁴⁹⁾を講師に招き、その教育に当たらせた。それは1859年（安政6年）からキリスト教伝導目的で来日していたジェームズ・カーティス・ヘボン¹⁵⁰⁾の協力による。リード女史はアメリカでナイチンゲール式看護教育を受けたとされる。テキストは『The Hand Book of Nursing』を使用した。同著は、コネチカット看護師学校がテキストとして使った書物である。

この後、高木は明治期の専門学校令や大正時代の大学令への教育制度変遷過程において、自身が運営していた医師養成の為の成医会講習所を慈恵医科大学へと発展させた。しかし、開設した看護婦教育所を学校教育政策へ位置づけることはなく、先述した大正の“臨時教育会議”の席上、“高

学歴女性の出産年齢の上昇及び出産率の低下”についての発言を行い、女子高等教育の発展・拡充にストップをかけたのである。

4. アメリカ女性宣教師達による看護師教育の提唱

先述したように、わが国における看護教育の提唱が婦人慈善会によって提唱され、1885年（明治18年）に有志共立東京病院看護婦教育所が開設されたが、1883年（明治16年）には、アメリカ女性宣教師達による看護師教育の提唱がなされている。例えば、大阪における日本プロテスタント宣教師全体会議の席上で、フェリス女学校のメアリー・キダー¹⁵¹⁾は「女性のための仕事の一つで大変重要なものであり、本国の伝導協会の注目に値するものにキリスト教看護師の養成がある。この事業は大変な設備を必要とするため、私にとっては手強いものであるが、重要なものであり、早く有能な女性達が看護師の仕事に就くように希望するものである。」¹⁵²⁾と述べている。又、大阪梅花女学校のアビィ・マリア・コルビー¹⁵³⁾もこの発言に先だって看護教育の重要性を述べた。彼女はすでにアメリカのボストン看護婦養成所を卒業して看護師の資格を有している教師であり、1879年（明治12年）から宣教目的で来日していた。彼女たちは「日本人の性格は、看護の仕事に適している人が多いのに、現在のところ、その適性を旨く生かすための知識を持ち合わせていない。その知識を与えるなら、それが良い刺激となって、この国の医学的使命の遂行に良い効果を与えることになる。」¹⁵⁴⁾と述べ、看護教育に関する決議案を提出した。

アメリカではすでに1873年（明治6年）に婦人グループによってマサチューセッツ総合病院にボストン養成学校、ニューヨーク、ベルビュー病院にベルビュー養成学校、ニューヘブーン病院にコネチカット養成学校が設立され、看護師の養成が開始されていた。捨松が看護教育を受けたのは、コネチカット養成学校である。京都看病婦学校の教育の為に招聘された外国人看護教育者リンダ・リチャーズ¹⁵⁵⁾は、ボストン看護師養成所を卒業したアメリカ初のトレインド・ナース（Trained Nurse）である。同校は、同志社大学の敷地内に設立された看護養成所であり、アメリカン・ボードの宣教医として来日したペリーの提唱によって実現した。

次にミッション系として1886年（明治19年）に、桜井女学校附属看護婦養成所が設立された。同校は、アメリカ長老教会から1874年（明治7年）から、伝導目的で来日していたメアリー・ツルー¹⁵⁶⁾の協力を受けた桜井ちか¹⁵⁷⁾が設立した桜井女学校（現女子学院）に付設されたものである。看護の教育者にはスコットランドのエディンバラにある王立診療所に作られた看護婦学校の卒業生であるアグネス・ベッチ¹⁵⁸⁾が招聘された。

桜井女学校附属看護婦養成所の運営は、その財政支援母体であるべきアメリカン・ミッションの動向如何にかかっていた。ミッションの代表的人物であるヘボン「病人に使える看護師に教える事に関し、どうしてその事が宣教師団の仕事の中に含まれているのか分かりません。専門の看護師問題は、この問題が取り入れられている程度の高い文明から生まれたものです。」¹⁵⁹⁾と述べ、看護教育所の運営に難色を示し必要な資金援助をおしんだ。しかし、卒業生には卒業生である鈴木や大関等は後の看護界に多大な影響を与えた人物であった。

おおよそ、病人の看護に対する考えはキリスト教の“隣人愛”に始まる。ゼーレン・オービエ・キルケゴール¹⁶⁰⁾によれば“隣人愛”というのは、自己とは全く無縁な他者に対する愛の実践である。従って、看護という職業ほどキリスト教的愛の実践に相応しい職業はなかった。これはナイチンゲールが看護という職業を“神への道”につながる職業として考えを有していたこととも一致する。実際にドイツでは“母の家方式”によって布教活動を行い、イギリス国内では、エリザベス・フライ¹⁶¹⁾が母の家方式によって看護活動を展開していた。フライの活動に影響を受けたルーテル教会の牧師テオドール・フリードナー¹⁶²⁾はドイツのカイゼルスウェルト（Kaiserswelth）赴任後、カイゼルスウェルト学園を設立、看護師及び教員を養成した。ナイチンゲールはこの学園で短期間であるが看護の教育を受けている。その内容は『カイゼルスウェルト学園によせて』¹⁶³⁾にまとめられている。ナイチンゲールは自己の経験を著作にまとめ、看護活動を単なる慈善活動ではなく、明確に職業として位置づけようとした。つまり、神の道につながる職業でありながら、なおかつ、女性達がその職業生活をとおして、経済的にも精神的にも自立することを目指したのである。アメリカの女性宣教師たちは、熱心に我が国の女子教育

に携わると同時に看護教育にも関与したが、しかし、その後の国内の政治的・経済的・教育制度変遷過程により、ミッション系の看護婦養成所の運営は困難となった。

■ おわりに

明治維新を果たした我が国の思想的・政治的發展経緯の中で実施された教育政策の中で、ナイチンゲール方式による看護教育がどのような経緯で導入されたのか、明治期中期を中心に教員養成・女子教育を視野に入れながら検討してきた。

明治政府は国民の教育の機会均等に立脚する“学制”を發布し、男女の別をしない教育政策を推進しようとした。まずは、初等教育を担う教員養成が見習い制度によって開始されたが、明治期中期の教育政策転換の結果、教員の養成には男女別々の師範学校が推進された。見習い制度で始まった教員養成は女子教育共々、初等・中等・高等教育に位置づけられることはなかった。そして明治期の教育政策上に看護教育は認められない。

他方、我が国の看護教育は、婦人慈善会の“看護師教育所設立の主旨”によってナイチンゲール方式による有志共立東京病院看護婦教育所が開設され、看護教育が開始された。

続けてアメリカの女性宣教師が看護教育所設立要請を熱心に行い、ミッション系の看護師養成所も設立された。彼女たちは、我が国の女子教育に携わると同時に看護教育にも関与したが、その後の国内の政治的・経済的・教育的事情により、ミッション系の養成所運営は困難となった。特に、“学制”及び“医制”によって教育が整備され発展した。官軍によって設立された“大病院”が東京大学医学部の付属病院となり、ミッション系の一つであった桜井女学校付属看護婦養成所の実習施設となったが、同病院は医学としては最高峰であったが、教育を受けた者とそうでない者との看護実践上の問題があった。

女子教育政策が変換されても初等教育の義務付

けは為されていたが、明治期の女子の就学率は低かった。明治期中期、ナイチンゲール方式が導入され、教育が開始されたが、看護教育は学校教育政策には位置づけられなかった。それは病院に付属する養成所としての位置づけであり、文部省が主管する教育政策範囲外であったとも考えられるが、女性に対する我が国独特の思想的な慣習と偏見、宗教上の慣習と拘束、訓練を受けにくる女性の多くに見られる教育水準の低さ等が看護の発達を阻害したと考える。さらに、我が国の看護教育推進者は、ナイチンゲールが行った“見習い制度”による看護方式を採用、病院に付属する養成所として看護教育を開始したが、その教育は形式的な模倣にすぎず、ナイチンゲールの教育思想を十分に研究していなかった。

優れた看護師は優れた女性であると述べ、優れた女性は、その知性、倫理、実践において最上のものを患者に惜しみなく与える女性であると述べたナイチンゲールの看護方法は見習い制度であったが、女性を看護師として訓練する教育において、その教育の主眼とするところは人格の問題であり、それは単に技術的な教育を施せば良いと言うものではない。“見習い制度”によって開始された看護教育は、女性の知性の開発的・実験的工夫がある。そこには必然的に人の精神が、社会過程を前提として開発・発展していくといった彼女の認識経験論的教育思想が反映されている。今日、高等教育での看護基礎教育が実施されるようになった。ナイチンゲールの教育思想は、教育基本法における教育の目的は“人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成”であり、“学校教育法”における高等教育機関としての大学の学術（Art）の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道德的及び応用的能力を展開させるといった教育目的にも一致している教育の本質論的な思想である。

注釈

- 1) フローレンス・ナイチンゲール（Florence Nightingale 1820－1910）；イギリスの看護教育及び社会改革家。イタリアで生まれ、ドイツのカイゼルスウェルト学園で看護を学び、その後、婦人病院の看護監督官になるが、1854年（安政1年）、クリミア戦争勃発後に看護師として従軍し、クリミアの天使と呼ばれた。1860年（万延1年）、聖トマス看護師学校を創立。卒業生を以ってその優秀性を示

し、ナイチンゲール方式と呼ばれる教育方法が世界中に広まった。その思想の根本には人々の健康と公衆衛生の普及という概念があり、女性をしてその役割が果たせるように企画したものである。女性の解放及び自立という意味でもナイチンゲールの果たした役割は大きく、実践的女性解放主義者とも呼ばれる。

- 2) 学制：1872年（明治5年）に交付された我が国初の学校教育法。
- 3) ケイ・シャトルワース（Kay Shuttleworth 1804－1877）；医師でもあり、救貧法行政官であった。ナイチンゲールの友人であるエドウィン・チャドウィック（Sir Edwin Chadwick 1800－1890 当時師範学校長）はシャトルワースの友人でもある。
- 4) 三好信治著；イギリス公教育の歴史的構造，垂紀書房，p144, 1968年。
- 5) マシュー・アーノルド（Matthew Arnold 1822－1858）；イギリスの詩人，批評家。トマス・アーノルド（Thomas Arnold 1795－1842イギリスの教育家，歴史家）の息子。『教養と無秩序』などでイギリス国民の清教徒的偏狭を攻撃して，ギリシャ精神の必要を説き，文芸批評から文明批評に至った。ナイチンゲールの従兄弟であり，詩人でもあるアーサー・ヒュー・クラフは彼の友人である。
- 6) 三好信治著；前掲書4)，p322。
- 7) 佐々木秀美著；ナイチンゲールから影響を受けた4人の日本人－（その2）女子教育のパイオニア津田梅子と安井てつ，看護学統合研究，Vol. 15, No. 2, pp22-48, 2014年。
- 8) 津田梅子（1864－1929）；明治期から大正期の女子教育家。津田義塾大学の創設者。1871年（明治4年），開拓史派遣の5人の少女の一人として岩倉使節団と共にアメリカに渡った。他メンバーは吉益亮子，上田貞子，山川捨松，永井繁子。
- 9) 安井てつ（1870－1945）；明治・大正・昭和期の女子教育者。1896年（明治29年）家政・教育学研究を目的とする文部省留学生としてイギリスに留学。教育学と教育史を学び，ケンブリッジ大学とオックスフォード大学で教育学と心理学などを修めた。女子高等師範学校教授，舎監を兼任。1917年（大正6年）東京女子大学の学監となる。
- 10) Florence Nightingale (1858)；Subsidiary Notes as to the Introduction of Female Nursing into Military Hospitals.（湯楨ます他訳；ナイチンゲール著作集第一巻，女性による陸軍病院の看護，p39, 現代社，1985年。）
- 11) 佐々木秀美著；ナイチンゲール方式による看護教育の特徴とその拡がり－教育の創造と伝承－，看護学統合研究，Vol.13, No.1, pp29－48, 2013年。
- 12) 佐々木秀美著；ナイチンゲールと面会できた4人の日本人－（その1）石黒忠恵と佐伯理一郎－，看護学統合研究，Vol.14, No.1, pp15－46, 2013年。
- 13) 佐々木秀美著；歴史に見るわが国の看護教育－その光と影，青山社，2005年。
- 14) 江藤新平（1834－1874）；佐賀県出身，明治維新の政治家。1872年（明治5年）には司法卿に就任した。
- 15) 大久保利通（1830－1878）；薩摩藩士。西郷隆盛と共に討幕運動に参加。長州藩との連盟により，王政復古を実現した。1871年（明治4年），征韓論派と対立，彼らの失脚により政治の中枢となった。
- 16) 木戸孝允（1833－1877）；長州出身幕末・明治期の政治家。大久保利通，西郷隆盛とともに明治維新の三傑。王政復古後，明治新政府のメンバーとして五箇条の誓文作成に関与し，1869年（明治2年）の版籍奉還実現に中心的役割を果たした。
- 17) 岩倉具視（1825－1883）；幕末・明治時代初期の公家出身の政治家。
- 18) 大木喬任（1832－1899）；佐賀県出身。明治維新後東京府知事。民部卿・文部卿・司法卿を努める。特に三回にわたって文部大臣を務め，学制・学校令・教育勅語などの新しい教育体制の整備に尽力した。
- 19) 大政官の布告；大政官というのは律令制で国政を総括する最高機関。政務審議部門として左大臣・右大臣・大納言・参議・内大臣が加わり公卿と呼ばれる。その事務局として少納言・外記・史生，行政執行・命令部門として弁官（左右の大中小弁）の三部門によって構成されていた。1868年（明治元年）政体書により設置された最高官庁を言う。学制の趣旨声明書（太政官布告第214号），文部

- 省はここに学制を定めて従来の民衆の学問に対する認識を改めさせ、一般の人々に等しく学問を授けることを計画した。勉強してこそはじめて立身出世ができるのであると述べている。
- 20) 日本近代教育史事典編集委員会編；日本近代教育史事典，p 419，平凡社，1971年。
 - 21) 郷学校；郷というのは律令時代の地方行政区画の末端単位。郷学校と言うのは寺小屋よりやや程度の高い庶民を対象とする学校。幕府によって建てられたもの，官民協力によって建てられたもの，町村によって建てられたものがある。
 - 22) 義校；小学校の前身をなす簡易な初等学校，一般住民の協力により主として寄付金によって設立。最初に設立されたのは1871年（明治4年）名古屋に創設されたのを契機に，その後，1－2年間の間に愛知県・岐阜県に多数設立された。
 - 23) 井上久男著；近代日本教育法の成立，p 19，風間書房，1990年。
 - 24) 田中不二麻呂（1846－1909）；学制の実施期から教育令実施当時まで文部省内にあって実質上，教育政策を指導・推進した中心的人物。
 - 25) デイビット・モルレー（David Murray 1830－1905）；アメリカ人。1873年（明治6年），文部省に招かれ来日。わが国文教政策の最高顧問。田中不二麻呂文部大臣に協力して“学制”の実施を指導した。
 - 26) 津田梅子（1864－1929）；明治期から大正期の女子教育家。津田義塾大学創設者。1871年（明治4年），開拓史派遣の5人の少女の一人として岩倉使節団と共にアメリカに渡った。他メンバーは吉益亮子，上田貞子，山川捨松，永井繁子。
 - 27) 吉川利一著；津田梅子，p128，中央公論社，1990年。
 - 28) 森有礼（1847－1889）；薩摩藩士。上野景範（1845－1888 長崎で蘭学と英学をまなぶ）に英学を学びイギリス・アメリカに留学。第一次伊藤内閣の時に初代文部大臣となり。学校制度の改正を行う。また私財により商法講習所（現在の一橋大学）を設立した。
 - 29) 日本近代教育史事典編集委員会編；日本近代教育史事典，p 423，平凡社，1971年。
 - 30) 成瀬 仁蔵（1858－1919）；明治から大正のキリスト教牧師（プロテスタント）であり，日本における女子高等教育の開拓者の1人。日本女子大学（日本女子大学校）の創設者。
 - 31) 山川健次郎（1854－1931）；明治・大正教育界の巨人。物理学者，教育者。大山捨松の実兄。1870年（明治3年）北海道開拓使の推挙でロシアに留学。1871年（明治4年），開拓使留学生として渡米，エール大学に学ぶ。1879年（明治12年）東京帝国大学教授，1888年（明治21年）博士号授与者としてわが国最初の理学博士となる。1901年（明治34年）東京帝国大学総長になった。
 - 32) 高木兼寛（1849－1920）；宮崎県生まれ。1868年（明治1年），東北征討軍に軍医として加わった後，鹿児島藩立開成学校に入学してイギリス人医師ウィリス（注139参照）に学んだ。1872年（明治5年）より海軍に出兵し，1875年（明治8年）からイギリス，セント・トマス病院に留学する。帰国してからは東京海軍病院病院長を務めながら，1881年（明治14年）に成医会を結成，成医会講習所を設立（現在の東京慈恵会医科大学の前身）。1882年（明治15年）海軍省医務局長となり，脚気病対策に取り組んだ。1888年（明治21年）我が国最初の医学博士となった。
 - 33) 婦人慈善会；伊東博文夫人，井上こわし夫人，森有礼夫人，有須川の宮城仁親王妃薫子夫人等で組織化された。
 - 34) Florence Nightingale (1882) ; Nurses, Training of, and Nursing the Sick, (湯槇ます他訳；ナイチンゲール著作集第二巻，看護師の訓練と病人の看護，p 430，現代社，1985年。)
 - 35) Florence Nightingale (1888) ; To the nurses and probationers trained under the “Nightingale Fund”, (湯槇ます他訳；ナイチンゲール著作集第三巻，看護師と見習い生への書簡，pp430-431，現代社，1985年。)
 - 36) Martha Vicinus & Bea Nergaard Edited ; Ever Yours, Florence Nightingale Selected Letters, p30, VIRACO PRESS, 1989.
 - 37) 佐々木秀美著；ナイチンゲールとミルとの論争－ヒューの論文を手がかりに－，総合看護，Vol.37, No.3, pp53－64, 2002年。

- 38) フリードリッヒ・エンゲルス (Friedrich Engels 1820-1895) ; ドイツの社会主義者.
- 39) Florence Nightingale (1882) ; 前掲書34), p 95.
- 40) Florence Nightingale (1888) ; 前掲書35), p 75.
- 41) Florence Nightingale (1888) ; 前掲書35), p 400.
- 42) エミール・デュルケーム (Émile Durkheim 1858-1917) ; オーギュスト・コント (Isidore Auguste Marie François Xavier Comte 1798-1857) 後に登場した代表的な総合社会学の提唱者である. 社会学の他, 教育学・哲学などの分野でも活躍した. 特に彼の独自の視点から社会現象を分析し, 経験の科学としての社会学の立場を鮮明に打ち出した人物である. 実証主義の科学として社会学が未だに学問として確立されていない状況を見たデュルケームは, 他の学問にはない独自の対象を扱う独立した科学としての地位を築くために尽力した.
- 43) ジョン・デューイ (John Dewey 1859-1952) アメリカの哲学者. プラグマティズムの大成者として概念道具説を主張し, 新しい行動的ヒューマニズムによって, 進歩主義教育の創始者となる. ヴァーモント大学を卒業, ジョンス・ホプキンス大学で学位を取り, シカゴ大学, コロンビア大学の主任教授としてアメリカの哲学界のみならず, 思想界全体を指導した.
- 44) デューイ著, 松野安男訳; 民主主義と教育, 上, p187, 岩波書店, 1982年.
- 45) 佐々木秀美著; 前掲書7)
- 46) 片山清一著; 近代日本の女子教育, p 15, 建帛社, 1881年.
- 47) 唐沢富太郎著; 教師の歴史, p107, 創文社, 1955年.
- 48) 梅根悟監修; 世界教育史体系, 教員養成, 講談社, 1974年.
- 49) F・ゲッセル著, 村田文夫訳; 子供育草, 玉山堂, 1874年.
- 50) ハスケル著, 永峰秀樹訳; 家政要旨, 1874年.
- 51) クレンケ・ハルトマン著, 近藤鎮三訳; 母親の心得, 1875年.
- 52) マルチンダル著, 林義直訳; 四民須知養生浅説, 蘆灣漁舎櫛, 1875年.
- 53) Florence Nightingale (1860) ; Note on Nursing, p3, Scutari Press, 1992.
- 54) Florence Nightingale (1860) ; 前掲書53)
- 55) 杉田暉道他著; 看護史, 医学書院, 1987年.
- 56) 曲直瀬道三 (1507-1595) ; 道三は医学を仏教から分離し, 儒教の精神を医道の根本精神とした.
- 57) 曲直瀬道三著, 北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究所温知会有志編訳; 啓迪集, p13, 思文閣出版, 1995年.
- 58) 貝原益軒 (1630-1714) ; 江戸前期の儒学者, 教育家. 福岡藩の家臣. 著書に『女大学』, 『養生訓』がある. 『養生訓』は日常生活における健康維持のための心得的内容.
- 59) 貝原益軒著; 養生訓, p24, 岩波書店, 1993年.
- 60) 実証的方法; 実際に経験や観察によって実証可能な事柄について証明することであり, その意味合いから儒学と医学はその根本精神は一緒である. 実証の精神こそ古代聖人君子の道であると考えた.
- 61) 山脇東洋 (1705-1762) ; 中国解剖学に疑問を持ち, オランダの人体解剖学の医書を入手し, 1754年 (宝暦4年) 京都で行われた罪人の腑分けに立会い, その正確さに驚いた. 1759年 (宝暦9年) に『蔵志2巻』を著した.
- 62) 杉田玄白 (1733-1817) ; 近代医学の道を開いた. 解体新書はドイツ人クルムス (J. Kulmus の解剖書 (Anatomische Tabelle) の蘭訳本 (1734年版) を日本訳にした.
- 63) 華岡青洲 (1760-1835) ; 江戸後期の漢蘭折衷外科医. 花岡流外科開祖. 1804年 (文化1年) まんだらげ (朝鮮朝顔) を中心にして得た通仙散を麻醉薬として用い, 世界初の全身麻酔による乳がん摘出術に成功した.
- 64) 有吉佐和子作; 華岡青洲の妻, 新潮社, 1967年.
- 65) 緒方洪庵 (1810-1863) ; 蘭学者であり, 医学者である. 備中足守藩 (現在の岡山県) の出身. 1826年 (文政9年), 大阪の中天游の塾「思々斎塾」で西洋医学に基礎を学んだ. 1836年 (天保7年) に蘭学を学ぶために長崎に遊学した.

- 66) ヨハン・エルドウィン・ニーマン (Johannes Erdewin Niemann 1796–1850)；長崎オランダ出島商館長，医師でもあった。
- 67) 福沢諭吉 (1834–1901)；慶応義塾大学の創始者。1878年（明治11年）ごろから自由民権運動に巻き込まれた。著作に『学問のすすめ』がある。教育者としての彼の精神は独立自尊である。
- 68) 大村益次郎 (1824–1869)；代々医の家系。緒方洪庵（注65参照）の適塾に学び医業を開いた後，幕府の講武所教授となる。その後，萩藩で蘭学を教え，西洋学兵学教授になった。
- 69) 佐野常民 (1822–1887)；日本赤十字社の創立者。1877年（明治10年），西南の役では新しい武器の攻防によって多くの兵が野戦に倒れた。この時，ヨーロッパで行われている赤十字と同様の救護団体を作ろうと思い立った。
- 70) 長与専斎 (1831–1902)；16歳で緒方洪庵の適塾に入門。1871年（明治4年），文部省が設置されたとき，ドイツにおける医療制度を視察し，医制76条の構想を練り，1874年（明治7年）交付した。1873年（明治6年）には文部省医務局長に就任，医務局が内務省に移管されたとき，衛生局と改め，初代衛生局長に就任した。
- 71) ヨハネス・レイディウス・カタリヌス・ボンペ・ファン・メールデルフォールト (Johannes Lijdius Catharinus Pompe van Meerdervoort 1829–1908)；通称ボンペ，ベルギー出身のオランダ軍医。幕末に来日し，オランダ医学を伝えた。日本で初めて基礎的な科目から医学を教え，現在の長崎大学医学部である伝習所付属の西洋式の病院も作った。また，患者の身分にかかわらず診療を行ったことでも知られている。
- 72) 土岐源頼徳 (1843–1911)；明治時代の軍医。1869年（明治2年），大学准少寮長となり，長谷川泰（注59）参照），石黒忠恵（注58）参照）らと学生を監督し，1874年（明治7年），陸軍軍医に任ぜられた。1879年（明治12年），西南戦争に従軍，1894年（明治27年），日清戦争に従軍した。
- 73) 石黒伴忠恵 (1845–1941)；医学者。陸軍軍医。1879年（明治12年）東京大学医学部総理心得となり，次いで陸軍軍医監，軍医本部長としてわが国の軍医制度の創設に尽力した。1920年（大正9年），子爵になり，枢密院顧問官，日本赤十字社社長となった。
- 74) 長谷川平泰 (1842–1912)；明治期の医学者であると同時に政治家でもある。西洋医養成のために済生学舎を設立した。1869年（明治2年）の頃は大学東校の少助教。
- 75) 厚生省医務局編；医制百年史，p21，ぎょうせい，1976年。
- 76) レオポルト・ミュルレル (Benjamin Carl Leopold Müller 1824–1893)；ドイツ生まれ。1871年（明治4年）来日。大学東校の学制の制定に尽力した。外科学，解剖学，生理学，神経学，薬局学などを教授し，東京帝国大学医学部を実質的にドイツ医学の基礎を築いた。
- 77) テオドール・ホフマン (Theodor Eduard Hoffmann 1837–1894)；明治初期に来日したドイツ人医師。ドイツ海軍軍医少尉。東京帝国大学で内科・病理・薬物学担当した。
- 78) エルヴィン・フォン・バルツ (Erwin von Bälz 1849–1913)；1872年（明治5年），ライプツヒ大学医学部を卒業。1875年（明治9年），東京医学校（後の東京帝国大学医科大学，東京大学医学部）の内科医学正教授として来日。以後，1902年（明治35年）まで在職し，日本の近代医学の基礎づくりに貢献した。
- 79) ユリウス・カール・スクリバ (Julius Karl Scriba 1848–1905)；明治期に来日したドイツの外科医。ハイデルベルク大学で医学・植物学を学び，1881年（明治14年）に来日し，東京大学医学部の外科担当外人教授となる。
- 80) 岩倉使節団；明治維新期の1871年（明治4年）12月23日から1873年（明治6年）9月13日まで，岩倉具視（注17）参照を正使とし，日本からアメリカ合衆国，ヨーロッパ諸国に派遣した大使節団である。
- 81) ルイ・パスツール (Louis Pasteur 1822–1895)；フランスの細菌学者。彼は“近代細菌学の父”と呼ばれた。ワクチンによる予防接種を創始した。又，肺炎菌やレンサ菌の発見も彼の業績である。
- 82) ジョセフ・リスター (Lord Joseph Lister 1827–1912)；“近代外科学の父”と呼ばれ，石炭酸を消毒液に使って外科手術法を開拓し，術後の感染防止に貢献した。

- 83) ロベルト・コッホ (Robert Coph 1843-1910)；19世紀から20世紀のドイツの細菌学者。1866年（慶応2年）にゲッティンゲン大学を卒業後、1872-1880年（明治5-13）、ウォルシュタイン地方の医官として細菌学の研究に従事。1876年（明治9年）、炭疽菌の分離・純粋培養に成功。1882年（明治15年）結核菌を発見した。1884年（明治17年）にはコレラ菌の純粋培養に成功した。1885年（明治18年）ベルリン大学衛生学教授に就任、1890年（明治23年）、ツベルクリンを創製した。北里柴三郎（1853-1931日本の医学者・細菌学者）はコッホの弟子である。
- 84) アーマウアー・ハンセン (Gerhard Henrik Armauer Hansen 1841-1912)；ノルウエーの医師。ハンセン病の感染菌を発見し、その後、各国で予防法が確立した。
- 85) 厚生省医務局編；前掲書75)。
- 86) 川崎房五郎著；文明開化東京、光風社出版、1987年。
- 87) 瓜生岩（1829-1897）；福島県生まれ。江戸後期・明治期に活躍した社会事業家。戊辰戦争後は旧藩校の会津藩子女の教育に尽くした。1872年（明治5年）に東京の深川で救貧事業を研修し、福島に帰ってからは堕胎防止と救貧救護事業に着手した。1889年（明治22年）には福島教育所を設立、喜多方には産婆研究所を設置、さらに済生病院を設立した。また、福島では免囚の救済にあたり、その生涯を社会事業に貢献した。
- 88) 東京日々新聞、1890年（明治23年）2月26日付け。
- 89) 杉田暉道他著；前掲書55)、p82。
- 90) 小石川養生所；1722年（享保7年）、江戸小石川の薬草園に立てられた無料の庶民の治療所。小石川伝通院の医師、小川笙船（1672-1760 江戸時代の町医者で漢方医）は貧しい者の病氣治療をするところが必要であるとして八代将軍、徳川吉宗が設置した目安箱に投書をした。この訴状によって町奉行、大岡忠相に調査を命じ、オープンに至った。『赤ひげ診療所』はこの診療所の様子を山本周五郎が小説化したもの。
- 91) 上杉照姫(1842-1884)；上総の国飯野藩主保科正丕の三女。10歳で会津藩主松平容敬の養女となり、18歳で豊前中津藩主奥平昌服と結婚したが故あって離婚。江戸の会津藩邸に帰った。戊辰戦争の際に江戸から会津若松城に戻り、籠城に備えた。照姫は特に食料調整、傷病兵看護、爆弾処理などの指導者として籠城婦女子の指揮に当たった。
- 92) 杉田暉道他著；前掲書55)、p83。
- 93) 高山盈（1843-1903）；日赤病院初代看護監督。藤堂藩士吉岡家に生まれ、福山藩士高山宣直の妻となる。1885年（明治18年）から4年間華族女学校の教師となった1894年（明治27年）、日本赤十字社の看護師養成委員となり、生徒監督に任命された。同年に勃発した日清戦争では看護師を率いて広島陸軍予備病院へ行き、救護活動と看護取締りの任務を全うした。
- 94) 大病院；1868年（明治1年）、戊辰戦争で負傷した傷病兵の収容施設として横浜に海軍病院ができた。この横浜海軍病院がその機能の一部を移して大病院と称された。後にこの病院が東京帝大付属病院となる。
- 95) 杉田暉道他著；前掲書55)、p232。
- 96) 杉本かね（1838-1915）；正規の教育を受けていないが、専門職の看護師として我が国最初の人と看護の歴史には紹介されている。1868年（明治1年）、29歳で官軍病院の臨時看護師となり、続いて大学東校に勤めた。1873年（明治6年）に順天堂医院設立の際に同病院看護師取締りとなった。
- 97) 看護史研究会著；派出看護の歴史、p8、勁草書房、1983年。
- 98) 村上信彦著；明治女性史、p262、講談社、1876年。
- 99) 鈴木まさ（1857-1940）；静岡県土族加藤信盛の長女として生まれた。横浜のフェリス・セミー（現在のフェリス女学校）に学んだ。夫は西南の役に大隊長として活躍した鈴木良光陸軍歩兵少佐であったが、仙台の陸軍病院で病死した。夫の死後、桜井女学校付属看護師養成所に入学。卒業後は東京帝国大学医学部附属医科大学、一医院の内科婦長として勤務した。
- 100) 大関ちか（1858-1932）；下野国黒羽（現在の栃木県那須郡黒羽町）の国家老大関弾右衛門の次女として生まれる。明治維新で城主が自害した後、苦境に立たされ帰農した。一度結婚するが、夫への

- 不信から離婚した。その後に植村正直（1858－1925）牧師と知り合い、牧師の勧めによって桜井女学校付属看護婦養成所に入学した。大関ちかについては大関和子（ちか）や千賀（ちか）と記述されたりしている。
- 101) 三浦謹之助著；日本における看護師の起源，看護学雑誌，p2，医学書院，1946年。
 - 102) ジョン・カッティング・ベリー（John Cutting Berry 1847－1936）；アメリカン・ボード宣教医。1871年（明治4年）にフィラデルフィアのジェファソン医科大学を卒業。1872年（明治5年）来日。神戸市で貧しい人たちの施療に当たった。1883年（明治16年），京都に移り，医学校，病院，看護師学校の設立計画に参画した。
 - 103) John C. Berry; Training: Schools For Nurses, p29, (September20, 1886), Seikai Journal, 1887.
 - 104) Florence Nightingale (1888) ;前掲書35), p367.
 - 105) チャールズ・ディケンズ（Charles Dickens 1812－1870）；イギリスの小説家。法律事務所で下働き後に民法博士会館の議事速記者になり，22歳でロンドンの新聞記者になる。彼は小説中に多彩な人物を登場させ，その当時の社会悪を激しく批判した。小説『マーティン・チャズルウィット』ではギャンプ婦人という卑しい女性を登場させ，病院看護の実態を批判した。
 - 106) Charles Dickens: Martin Chuzzlewit, Oxford University Press, 1987.
 - 107) 川崎房五郎著；前掲書86), p 216.
 - 108) 大山捨松（1860－1919）；岩倉使節団とともにわが国最初的女子留学生。ニューヘブンの宣教師レオナルド・ベーコン夫妻の家庭に入って教育を受けた。卒業後，ニューヘブンの市民病院で看護学の勉強をした。帰国後，陸軍大臣大山巖（注114参照）と結婚した。日本赤十字社に働きかけ日本篤志婦人会を発足させた。東京帝国大学の総長になった山川健次郎（注31参照）は実兄である。
 - 109) 黒田清隆（1840－1900）；薩摩藩士。1870年（明治3年）には北海道開拓使次官。1874年（明治7年）には北海道開拓長官になった。1888年（明治21年）内閣を組閣したが，大隈重信外相の条約改正案に対して世論の反対を受けて辞職した。
 - 110) 吉川利一著；前掲書27), pp23-25.
 - 111) 山川大蔵（1845－1898）；会津藩家老。幼名は与七郎，長じて大蔵，維新後は浩と改める。藩主松平容保が京都守護職になると上京した。維新後は松平家復興と旧藩士援助のため，斗南藩（現在の青森県）の責任者である権大参事に就任。2歳の藩主 松平容大を助けて斗南藩運営の先頭に立った。1871年（明治4年），廃藩置県後陸軍に奉職，陸軍少将まで進んだ。軍人現役のまま東京高等師範学校校長，貴族院議員となり，1891年（明治31年），男爵になった。
 - 112) 松平容保（1835－1893）；会津松平藩9代目の藩主幕末の京都守護職として京都の治安と公武合体に力を尽くし，時の孝明天皇の厚い信頼を得る。戊辰戦争で落城。その後，謹慎命令を受けた。1872年（明治5年）に謹慎がとかれ，1880年（明治13年）より東照宮宮司に任ぜられた。
 - 113) 坂本竜馬（1835－1867）；薩長連合の立役者として明治維新に貢献した。
 - 114) 新開雑誌，1871年（明治4年），11月2日。
 - 115) 吉川利一著；前掲書27), p 21.
 - 116) フランシス・ベーコン (Francis Bacon) ；エール大学医学部教授。ジョージ・ウールセイの夫。ジョージ・ウールセイはアメリカの裕福な家庭の娘であり，ニューヨーク病院の短期教育を受けた後，病棟実習から陸軍に従軍。南北戦争を経験した後，看護師教育に情熱を傾けた女性。
 - 117) 久野明子著；鹿鳴館の貴婦人大山捨松，中公文庫，1997年。
 - 118) The Hand Book of Nursing ; Published under the direction of the Connecticut training-school for nurses, state hospital, New Haven, Connecticut, / London ; J. B. Lippincott & Co. 1880.
 - 119) 大山巖（1842－1914）；鹿児島県出身。西郷隆盛の従兄弟。明治維新政府で陸軍卿。陸軍大臣。近代日本陸軍の建設に貢献した。妻が出産後に産褥熱によって死亡したため残されたこの育児と教育のために捨松と結婚した。
 - 120) アリス・ベーコン（Alice Mabel Bacon 1847－1918）；山川捨松がホームステイしたレオナルド・ベーコン牧師の末娘。

- 121) 久野明子著；前掲書117), p 181.
- 122) 伊藤博文 (1841－1909)；山口県生まれ。明治期を代表する政治家。明治維新後は新政府の要職を歴任し、1885年 (明治18年)、初代内閣総理大臣となった。1889年 (明治22年) に発布された大日本帝国憲法制定の中心人物。
- 123) 久野明子著；前掲書117), pp214－215.
- 124) 井上馨 (1835－1915)；明治時代の政治家。長州藩の下級武士の出身。吉田松陰の松下村塾に学んで以来、伊藤博文 (注117参照) と政治行動を共にした。明治政府ではおもに財政・外交面を担当した。
- 125) 捨松の姉；捨松には二人の姉がいる。彼女が帰国したとき長姉の双葉は東京師範学校の舎監の仕事についており、次姉の操はロシアに留学後、通訳の仕事をしていた。アリスに宛てた鹿鳴館のバザーについての捨松の手紙にはロシアに行っていた姉で、今は宮中の仕事をしていると書いてあるのでここでいう姉とは次姉の操のことであろう。
- 126) 徳富蘆花；(1868－1927)；明治期の小説家。兄は徳富蘇峰。1900年 (明治33年) に『不如帰』を書き文壇に躍り出た。人道主義的情熱と強烈な個性で、蘆花は近代文学史上で特別な地位を占めた。
- 127) 日赤篤志看護婦人会；看護師の重要性が認められていないときに日本赤十字社では有栖川宮妃を中心に有志の貴婦人が之に参加して、簡単な看護教育を受けた後、看護師と同じ服装を着て補助業務に当たり、戦時には傷病軍人の慰安などを行った。
- 128) 久野明子著；前掲書117), p 277.
- 129) 西南戦争；1877年 (明治10年) に鹿児島島の士族が征韓論を受け入れられずに新政府から身を引いた西郷隆盛を担いで起こした戦争。
- 130) Charles Singer and E. Ashworth Underwood (1962)；A Short History of Medicine, Oxford University Press, (酒井シヅ・深瀬泰旦訳；医学の歴史3, p612, 朝倉書店, 1996年.)
- 131) 久野明子著；前掲書117).
- 132) 慈恵看護教育百年史編集委員会編；慈恵看護教育百年史, p17, 東京慈恵会, 1984年.
- 133) 富田仁著；鹿鳴館－擬西洋化の世－, p94, 白水社, 1988年.
- 134) 富田 仁著；前掲書133), p63.
- 135) ジョサイア・コンドル (Josiah Conder 1852－1920)；イギリスの建築家。1877年 (明治10年)、日本政府に招かれて工部省工作局雇として工部大学校教師を本務、同省営繕局顧問を兼務した。上野博物館他数々の建築設計を手がけた。
- 136) 有栖川宮熾仁親王御息所薫子 (1855－1923)；日本赤十字社の設立に尽力。慈恵医院幹事長、篤志婦人会幹事長。
- 137) 磯田光一著；鹿鳴館の系譜, p108, 磯田光一著作集5, 小沢書店, 1991年.
- 138) 高木喜寛著；高木兼寛伝, 三秀社, 1922年。松田誠著；高木兼寛伝, 講談社, 1990年.
- 139) ウィリアム・ウィリス (William Willis 1837－1894)；薩摩藩がイギリス公使を通して招いたイギリス人外科医。
- 140) 西郷隆盛 (1827－1877)；島津藩士。大久保利通と共に第一次長州征伐に参加。軍略家として注目される。その後、薩長同盟、鳥羽伏見の戦い、大政奉還、江戸無血開城、戊辰戦争で常に主役として活躍する。
- 141) ウィリアム・アンダーソン (William Anderson 1842－1900)；イギリス人軍医。1879年 (明治12年) の著作に『看病要法』がある。
- 142) Florence Nightingale (1863)；Note on hospital, (湯楨ます他訳；病院覚え書, ナイチンゲール著作集第二巻, 現代社1983年.)
- 143) サラ・エリザベス・ウォードローパー (Mrs. Sara Elizabeth Wardroper 1854－1887)；クックの『ナイチンゲール伝』には彼女のことを熟慮型ではなく、直感型の女性であるが組織力と管理能力、勇気と潔癖さは特筆するものがあり、その上決断力に優れており、彼女の考えていること、口に出す言葉、行動の間に矛盾が感じられず、いつも首尾一貫している女性であると紹介している。
- 144) Sir Edward Cook (1913)；The Life of Florence Nightingale, (中村妙子他訳；ナイチンゲール [そ

- の生涯と思想], 時空出版, 1993年.)
- 145) Cecil Woodham-Smith (1950); Florence Nightingale, (武山満智子他訳; フロレンス・ナイチンゲールの生涯, 現代社, 1987年.)
 - 146) ホイットフィールド (Mr. Whitfield); ルーシー・セーマーの『ナイチンゲール伝』では内科医. クックのそれは薬剤師と訳されている. ナイチンゲールがホイットフィールド氏に宛てた手紙には apothecary と書かれている. イギリスでは一種の薬店主が開業医も兼ねたらしいのでどちらも正しいようである.
 - 147) ジョン・クロフト博士 (John Croft 1833-1905); ナイチンゲール看護学校の教官としてホイットフィールドの後任になった聖トマス病院の外科医. 訓練生に対して講義, 症例のチェック, 定期的な試験等を行った (1873-1891).
 - 148) Florence Nightingale (1888); 前掲書35), p426.
 - 149) リード女史 (M. E. Reade); アメリカでナイチンゲール式教育を受け, 1881年 (明治14年) から, アメリカン・プレスビテリアン・チャーチの女性宣教師として来日. 1884年 (明治17年) から看護法の教授を週2回実施したが, 1885年 (明治18年) には有志共立東京病院との契約が成立し, フルタイムで勤務した.
 - 150) ジェームス・カーティス・ヘボン (James Curtis Hepburn 1815-1911); 1859年に医師として, 新約聖書の日本語訳を行ったブラウン (Samuel Robbins Brown 1810-1881), 明治維新政府の顧問を務めたフルベッキ (Guido Herman Fridolin Verbeck 1830-1988) と共に来日. それぞれ, 新時代の日本を背負っていく人材の育成を目指して塾を開いた. 1877年 (明治10年) にはブラウンが設立した塾を中心に東京一致神学校と, ヘボン塾の後身である東京一致英和学校, ヘボン塾で学んだ服部綾雄 (1863-1914) の英和予備校が合併し明治学院となった. ヘボンはそこの初代総理 (学院長) になった.
 - 151) メリー・キダー (Merry Eddy Kidder 1834-1910); アメリカ, バーモント州生まれ. 外国伝道の情熱からわが国に来日した初めての女性宣教師. 1870年 (明治3年) に日本最初の女子教育機関としてフェリス女学校を開校した.
 - 152) 亀山美知子著; 女達の約束, pp41-42, 人文書院, 1990年.
 - 153) アビィ・マリア・コルビー (Abby Maria Colby 1847-1917); アメリカの女性宣教師・教育者.
 - 154) 亀山美知子著; 前掲書152), p52.
 - 155) リンダ・リチャーズ (Linda Richards 1841-1930); アメリカの看護師. マサチューセッツのニューイングランド婦人小児病院内に設立された看護学校に1872年 (明治5年) に入学し, アメリカ初のトレインド・ナース (Trained Nurse) になった. 卒業後, ベルビュー病院の夜間監督となり, 1874-1877年まではマサチューセッツ総合病院看護学校で教育の任にあった. その後, 1877年 (明治10年) に英国に渡り, ロンドンの聖トマス病院, キングス・カレッジ, また, エディンバラ王立病院などで再度訓練を受け, ナイチンゲールの教育・指導を受けた. 1885年 (明治18年) に来日し, 京都看病府学校の看護教育に助力した.
 - 156) メアリー・トゥルー (Mary T. True 1840-1895); アメリカ出身の在日宣教師で明治時代の教育者. マリア・ツルーとも表記される.
 - 157) 桜井ちか (1855-1928); 東京都出身. キリスト教主義による女子教育家. 桜井女学校設立.
 - 158) アグネス・ベッチ (Agnes Vetch 1845-1945); 明治期初期に来日したイギリスの看護師. エディンバラ王立救貧院病院看護学校出身であり, 同校はナイチンゲール方式による学校でその第1回生である. 1887年 (明治20年) 来日. 1年間看護師の指導訓練に当たった.
 - 159) 高田みつ子著; 看護婦養成所の予算要求におけるプレスビテリアンミッション理事会との確執, p113, 看護教育, Vol.30, No.2, 1989年.
 - 160) セーレン・オービエ・キェルケゴール (Søren Aabye Kierkegaard 1813-1855); デンマークの宗教思想家. 真のキリスト者を求め, 信仰によって神の前に立つ人であり, そこに真の人間の生き方がある. 人間は常に真の自己たらんと欲する限り永遠者を求めて努力する必要がある, その努力の

過程が実存するという事である。

- 161) エリザベス・フライ (Elizabeth Gurney Fry 1780–1845)；イギリスの有名な社会改革者。クエーカー教徒。
- 162) テオドール・フリードナー (Paster Theodore Fliedner 1800–1864)；プロテスタントの牧師。ドイツのカイゼルスウェルトに赴任した際に人々が経済的に苦境に陥っていたため、救済資金を求めてイギリスに足を伸ばした。そこでエリザベス・フライ女子の女囚保護事業活動を知ってドイツに広めようとした。その一環として1836年（天保7年）に看護師の養成所も含めたカイゼルスウェルトベルト学園を創立した。
- 163) Florence Nightingale (1851)；The Institution of Kaiserswerth on the Rhine for the Practical Training of Deaconesses, (湯慎ます他訳；カイゼルスウェルト学園によせて、ナイチンゲール著作集第一巻，現代社，1985年.)